

平成 26 年第 18 回

札幌市教育委員会会議録

平成 26 年第 18 回教育委員会会議

1 日 時 平成26年 8 月 5 日（火） 13時30分～19時10分

2 場 所 S T V 北 2 条ビル 4 階 教育委員会会議室

3 出席者

委 員 長	山 中	善 夫
委 員	臼 井	博
委 員	池 田	光 司
委 員	池 田	官 司
委 員	阿 部	夕 子
委 員	町 田	隆 敏
教育次長	西 村	喜 憲
生涯学習部長	梅 津	康 弘
学校教育部長	大 友	裕 之
教育推進課長	井 口	誠 一
学事係長	村 田	行 信
学事係員	大 西	俊 之
教育課程担当課長	齊 藤	隆 浩
義務教育担当係長	佐 藤	圭 一
義務教育担当係長	和 泉	明 一
研修担当係長	田 中	義 直
研修担当係長	菅 野	智 広
義務教育担当係長	野 田	隆 之
指導主事	小 林	明 弘
義務教育担当係長	横 道	幸 紀
企画担当係長	山 田	健 一
指導主事	大 井	一 雄
指導主事	岩 渕	浩 憲
研修担当係長	村 岡	美千世
高等学校担当係長	幸 丸	政 貴
特別支援教育担当係長	山 田	浩 富
総務課長	杉 村	亮
庶務係長	井 上	達 雄
書 記	石 川	亜 樹

4 傍聴者 24名

5 議 題

協議第 1 号 平成27年度使用教科用図書を選定について

【開 会】

○山中委員長 それでは、これより、平成26年第18回教育委員会会議を開会いたします。

本日の会議録の署名は、池田官司委員と阿部夕子委員にお願いします。

【議 事】

◎協議第1号 平成27年度使用教科用図書の選定について

○山中委員長 本日は、これまでの2回の審議を受け、小学校用教科書、高等学校並びに中等教育学校後期課程用教科書、特別支援教育用教科書の順に審議を行います。

小学校用教科書については、国語と書写、社会と地図、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、体育の順に進めていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 では、そのような形で進めていきたいと思います。

まず、本日の審議に入る前に、前回までと同様に、私から委員の皆さんに確認させていただきたいことがあります。

前回の教育委員会会議終了後、本日まで間に、皆さんに、特定の組織あるいは団体、もしくは会社等から働きかけや影響力の行使、圧力などはありませんでしたか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 ただいま、皆さんから影響力の行使や圧力等はなかったとの回答をいただいたので、本日の私たち6人による協議は、教科書採択の公正・中立性を確保し得るものであると判断いたします。

続いて、さらにもう2点、確認させていただきます。

前回までの審議において、各小委員会委員長と高等学校及び特別支援教育部の部長に対し、審議委員に対する団体、会社などから働きかけや影響力の行使、圧力等はありませんでしたかという質問をしましたが、いずれも、ありませんとの回答でしたので、調査研究に対する圧力等はなかったものと判断いたします。

次に、小委員会委員長などの意見については、専門家の発言として参考にしてまいりましたが、本日の審議に当たりましても同様に考えたいと思います。

以上の2点について、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 本日は、審議会委員でもある各担当の指導主事に出席を求めて

いますので、審議の中で必要があれば、随時、質問をしていただきたいと思います。

それでは、小学校用教科書についての審議を始めます。

本日の審議では、前回までの審議において選定の候補とした教科書の中から1者を選定いたします。

これまでの審議でもそうですが、各教科書の特徴などから、札幌の子どもたちにとってどのような教科書がより望ましいかという点を大切にして審議していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、全体に関する事で、一つ、私から事務局に確認しておきたいことがあります。

前回の審議で、体育において、ユニバーサルデザインの観点に関しての質問がありました。しかし、前回の審議では、調査研究項目にしていなかったので、その点についての検討はしていないというお答えでしたが、この問題は、教科書全体にかかわることでもあるので、事務局でユニバーサルデザインの関係について検討した結果をご報告いただいて、本日の審議の参考にしたいと思います。

その点のご説明を事務局からお願いいたします。

○**学校教育部長** ユニバーサルデザインの観点については、改めて教科用図書選定審議会の小委員会の指導主事に確認したところ、本日の審議対象となっている発行者については、全ての教科用図書において、それぞれ色覚の個人差を問わず、より多くの人に見やすいカラーユニバーサルデザインに配慮などのユニバーサルデザインの観点から配慮している旨の記載がありましたことを報告申し上げます。

○**山中委員長** 特に差はないと考えてよろしいでしょうか。

○**学校教育部長** 本日の審議対象になっている教科書については、そうなっています。

○**山中委員長** ということを前提にしながら審議に入りたいと思います。

まず、国語と書写について審議を行います。

7月30日（水）の審議において、国語は、「三省堂」「教育出版」「光村図書出版」の3者、書写は、「光村図書出版」「日本文教出版」の2者を選定の候補としています。その中から、それぞれ1者をこの会議で選定することとします。

前回の審議を踏まえ、あるいは、その後さらに各委員の皆さんが教科書をお

読みになり分析などして得たこともいろいろあるかと思います。そういう中で、さらに質問したいことがありましたら先にお聞きして、その後に選定に関しての各委員のご意見を伺っていくことにしたいと思います。

何か質問はありますか。

○池田（光）委員 前回出た質問の中で、「教育出版」で新聞の記事を二つ出して読み比べて、その表現の違いなどに気づいて、意図的に考えるような手法をとっているところが非常によかったなという印象があります。そのほかの教科書では、そういった比較をしながら、あるいは、現実の教材を比較しながら書き手の意図について考えるようなものはありましたか。

○田中研修担当係長 「光村図書出版」の5年生になりますが、こちらも同様に、「新聞を読もう」という単元があり、その中で、金環日食の記事の全国版と地方版というもので比較し、そのことで記事の意図などについて考えるというものがあります。

「教育出版」の場合は、その記事の内容に加え、レイアウトについての比較というところまで子どもたちの課題として設定しています。「光村図書出版」の場合は、この内容の部分の比較ということで出されています。

○池田（官）委員 札幌市の調査研究項目の中に、書くことについて、ふるさと札幌についての学びの推進ということがあったと思います。この3者に絞られた時点で、札幌の書く活動などが取り上げられている点から、どちらかの出版社に特徴はありましたか。

○田中研修担当係長 3者とも、子どもたちが地域に意識を向けながら書く活動に取り組むというところでは工夫されています。

その中で、「教育出版」においては、現地学習など他の教科と結びつけて報告文を書いたりする活動というような他教科や総合的な学習とのつながりを持った教材というところに特徴がありました。

「光村図書出版」においては、前回も紹介いたしましたが、パンフレットづくりや随筆を書く活動で、こちらは札幌が具体的に例示されているものになっていますので、子どもたちがより関心を持って学習に取り組めるような工夫がされていると思います。

「三省堂」においては、「教育出版」と同様に、工場見学などの他教科との関連を図ることによって地域への関心を高めるような工夫がされていました。

○町田委員 3者の読書活動の取り扱いについても一度確認したいと思います。

より読書の幅を広げられるような活動に留意してつくられている教科書について教えてください。

○田中研修担当係長 3者とも、年間を通して60冊から70冊、学年によっては80冊ほどのさまざまな本の紹介がなされていました。また、読書に対して目的意識を持った工夫というものも3者ともになされていました。

その中で、「教育出版」の場合は、本の紹介や心に残った場面を絵であらわしたりというような、子どもたちが関心を持ちやすい学習活動が選定されていました。

「光村図書出版」の場合は、昔話の紹介や絵本を調べる活動、本のポスターやポップづくりというような幅広い活動が行われており、子どもたちがさまざまなジャンルの本に関心を持って取り組めるような工夫がされていました。

「三省堂」においては、本を紹介する、推薦するというような学習活動が設定されています。

○池田（光）委員 「三省堂」も非常によかったと思うのは、読書カードをつくって読書の目的を明確にしていく、意図させていくということです。ほかの教科書で、そのようなところを類似に意図されているようなところはありませんか。

○田中研修担当係長 目的意識を持って、相手に伝えていくという活動に取り組むことによって、読書への目的を持つというような意味では、「三省堂」の場合は読書活動がかなり中心に置かれていました。

それ以外の2者についても、読書カードとはまた違った形で、先ほどお話しした「光村図書出版」で言えばポスターやポップづくりという形で学校内の友達に伝えていくというような部分、「教育出版」ですと、1年生に「おはなしどうぶつえん」をつくるというものがあり、そういう活動を通して、友達同士で本を伝え合うというような取り組みがされていました。

○池田（光）委員 印象として、「教育出版」と「三省堂」では、文章と絵とか、心に残ったことを表現するところが非常に浮き彫らせているような気がしたのですが、それは、読書活動の理解、表現力、思考力も含めて非常に友好的な手法の一つでしょうか。

○田中研修担当係長　そう思われます。今は、読書は受け身で終わるのではなく、主体的に読書に取り組むというようなことで、自分はそう考えるというような発信型の読書活動が「教育出版」「光村図書出版」「三省堂」の3者ともに工夫されています。

○山中委員長　そのほかいかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長　それでは、具体的な選定に関して、委員の皆さんのご意見を伺いたいと思います。

お一人ずつご意見を伺っていききたいと思います。

今後、各教科についても同様に伺っていきますが、まず、国語については、私から見て右回りで、臼井委員から順次ご意見をいただきたいと思います。なお、町田委員は後にしていただくということで、今申し上げた順でご意見を頂戴するようにお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

○臼井委員　2つから決めかねているところがあるので、一応、2つ申し上げて、皆さんのご意見を伺いながら考えたいと思います。

3者が残っていますが、個人的には2者が同じということで、1者は「三省堂」、もう1者は「光村図書出版」です。

「三省堂」については、前回の問題点として、例えば、折り込みに別冊となっている資料集についてです。この扱いは子どもにとって紛失等の問題があるというご指摘がありましたが、これは指導上の工夫でどうにでもなると思います。例えば、私が担任になったら、別冊をなくしそうだったら、担任が教室で全部を集めて指導すれば何の問題もないわけです。それは問題なからうということで見ました。

内容のバランス、豊富さという点で見ると、正直に言って、「光村図書出版」が勝っていると思いました。例えば、説明文の中でも、点字の表が置いてあって、実際に点字というのはどのくらい大変なものなのかが体験的にわかるようなものがあります。あるいは、民話があったり、世界の話があったり、その辺のバランスと内容の豊かさという点では、1年生から6年生まで見ましたが、この点では「光村図書出版」が一番充実していたと思います。

その一方で、自分が学級担任として教えるときに、この内容に感動した、ぜひ教えたいという気持ちになるものとして見ると、「三省堂」はそろっていると思いました。例えば、最近、女子が理数系を目指すということが増えていて

も、日本は国際的にはまだ少ないというところで、女性の科学者に与える猿橋賞の猿橋勝子の伝記があったりと、こちらはこちらで物語文の中でも「命を大事にする」「わすれられないおくり物」等があります。また、作文も多様な書くことに対するアプローチがありますので、それは「三省堂」に分があるかと思います。

そういうことで、内容的なバランスで見ると「光村図書出版」、自分が教えたものが多いかどうかでは「三省堂」ということで、2者です。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、池田官司委員、お願いします。

○池田（官）委員 3者ともそれぞれ特色があり、非常に甲乙つけがたいところであると思います。その中で、私は、「光村図書出版」の教科書を最終的な候補にしたいと思います。

理由ですが、「光村図書出版」の特徴の一つとして、非常に主体的に学習に取り組めるような工夫が随所になされていると思いました。それとともに、例えば、グループディスカッション、つまり、学級討論などに関しても手順が非常に細かく書いていたり、読書に関しても各者ともさまざまな本を紹介してくださっていますけれども、読書の幅を広げていくというような点では「光村図書出版」の教科書がややすぐれているかなと考えました。

○山中委員長 ありがとうございます。

それでは次に、阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私も、「光村図書出版」がいいと思っています。

理由としては、札幌では読書が好きだという子どもたちが年々増えてきていると言われていますが、読書が苦手というお子さんもまだいらっしゃると思います。そういった意味では、本をどう選んだらいいかわからないというお子さんにも丁寧に示している点と、目的に応じて本を示しているなという印象がありました。また、図書館への行き方や、図書館の歩き方のような部分も丁寧に示されていると感じました。

もう一点は、札幌の題材、「ふわふわの雪」や時計台の記事なども取り扱われているところから、子どもたちにとっても親近感があるという意味でも推薦したいと感じました。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、池田光司委員、お願いします。

○池田（光）委員 この3者は本当に甲乙つけがたく、大変特色があって悩むところではありますが、私は「教育出版」がいいと感じています。

特に、先ほど申しましたように、本の紹介と、印象的なところを言葉だけでなくさまざまな形で表現する工夫がされています。ほかのところもされているのですが、「教育出版」のほうが受けとめやすいかなと思いました。子どもたちに興味を持たせる工夫が随分あるのではないかと考えたのが一つです。

また、全体的に、例えば現地学習へ行ったときの報告書のつくり方など、具体的なものと結びつきながら、書くことについて常に意識が高いのではないかなと思いました。

そのほか、非常に似たようなところが多くあって甲乙つけがたいところがあるのですけれども、今述べた観点から、「教育出版」がいいかと感じています。

○山中委員長 ありがとうございます。

それでは、町田委員、お願いします。

○町田委員 私は、「光村図書出版」を推したいと思います。

札幌市は、調査研究項目で読書活動の取り扱いという形で、一つ大きな観点を持っていますが、「光村図書出版」が読書の幅を広げられる活動が全学年に設定されていること、巻末には各単元に関連する本がジャンル別に数多く紹介されています。その目的にあわせて本を選ぶことを通して、国語の中で読書を自主的、主体的な学習に子どもたちを推し進めていく観点で、「光村図書出版」の教科書を選定すべきだと私は考えています。

○山中委員長 書写については別ですので、今のご意見のほかに、特に書写に関してもお聞きしたいと思います。

○臼井委員 書写は、「光村図書出版」と「日本文教出版」と2者ですけれども、前回、私が伺ったところ、今までの教科書は、国語が「光村図書出版」で、書写も「光村図書出版」ということでした。そのときに、基本的に国語と書写の教科書は同一である必要があるかどうかについて、必ずしも同一であることにこだわることはないというご意見でした。

それはそれとして、今回の書写を見ますと、私は「日本文教出版」を推します。そのわけを申しますと、実際に小学校の先生で書写の特別な訓練を受けることは前提にしていまません。例えば、教育大学に書写のコースがありますが、

これは非常にまれです。そうしますと、問題は、筆の使い方、持ち方、道具の置き方、姿勢であり、それを最も徹底しているのが「日本文教出版」です。

最初のページに姿勢があり、しかも、1年・2年、3年・4年、5年・6年と2年間同じものが載っていて、私も書道を教わったときに、道具の置き方、姿勢、筆の使い方を大変厳しく指導されたものですから、そこを徹底しているところで、私は「日本文教出版」を推します。

○山中委員長 では、池田（官）委員、どうぞ。

○池田（官）委員 私は、「光村図書出版」の教科書を推したいと思います。

これも、「日本文教出版」の教科書と「光村図書出版」の教科書で大きな差があるわけではなくて甲乙つけがたいと思いますが、漢字に関すること、漢字の組み立てや漢字の成り立ちについて、「光村図書出版」のほうが幾分有利なのではないかと思ひまして、「光村図書出版」を推したいと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

阿部委員、いかがですか。

○阿部委員 私も、「光村図書出版」がいいと思っています。

まず、札幌らしさということに関しては、先ほどの国語の教科書もそうですが、札幌の雪まつりを取り上げていたり、大雪像の写真やつくり方をまとめている点が非常にいいと思ひましたし、子どもたちに親近感を与えるのではないかという点がいいなと思っています。

また、はがきの書き方や、原稿用紙の使い方にも記載がありましたので、そのような意味でもいいなと思っています。

○山中委員長 ありがとうございます。

では、池田光司委員、お願いします。

○池田（光）委員 私は、「光村図書出版」を推薦したいと思います。

特に、習字で一番の悩みなどに気づくのは、学習前と書いた後と、工夫状態、発達状態、上手になっていくことを比較してみることができるのは上達の一つでもあるし、価値もあるということで、大変いいなと思っています。ほかは結構似たところがあるのですが、そこが大きく充実しているということで、「光村図書出版」を推したいと思っています。

○山中委員長 ありがとうございます。

町田委員、いかがですか。

○町田委員 私も、「光村図書出版」を推したいと思います。

書写に関連したコラム的な記事が掲載されており、書写への関心を高める工夫などもなされていることも含めまして、私は「光村図書出版」が適当だと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

多少分かれていますが、札幌の子どもにとってどうかという観点で考えていただくことが札幌市教育委員会の前提であろうかと思います。

先ほど、臼井委員から、国語の関係について悩んでいるというお話の中で、バランスのよさでは「光村図書出版」だけれども、教える立場からは「三省堂」がいいとありました。もちろん、札幌の子どもたちにとって教える立場から考えることも当然必要なわけですが、先ほど臼井委員が言われたバランスあるいは内容の豊かさというのは、子どもにとってと理解してよろしいですか。

○臼井委員 そのとおりです。

○山中委員長 そういうことを前提にしながら、もう少し意見交換をして、まとめていきたいと思います。

それぞれのご意見をお聞きになった上で、さらに述べたいことはありませんか。

○池田（光）委員 辞書との関係でいきますと、何回か読んでわからなかったのは、辞書の活用の仕方が導くのに上手というか、そこは判断できないかと思うのですが、そこら辺の印象がありましたら教えていただければと思います。

○田中研修担当係長 辞書については、基本は、3者とも、3年生で国語辞典、4年生で漢字辞典の使い方について詳しく説明しています。

「三省堂」は、それに加え、1年早く2年生の段階で国語辞典について簡単に紹介していて、同様に、漢字辞典については3年生の段階で紹介しています。ただ、3年生、4年生で使い方を詳しく説明した後については、それぞれの学習の中で関連して3者とも漢字辞典、国語辞典の使い方についてはそれぞれ触れられているところです。

○山中委員長 小口の写真もつけて紹介しているところもありましたね。

○田中研修担当係長 小口の使い方について触れられているのは、「光村図書出版」の3年生となります。これは、ほかの2者にはなかった特徴です。

○山中委員長 小口を紹介することによって、こういうことがプラスですよというのは何かありますか。

○田中研修担当係長 基本的に、中身はどの者も書かれているのですけれども、小口をこのような形で扱うことによって、子どもたちがどこの部分を見て引くと文字が的確に早く引けるのかをここで気づくことができると思います。

○山中委員長 ほかにご意見あるいはご質問はありますか。

今のところ、国語に関しては、臼井委員から決めかねているというお話があり、池田光司委員から「教育出版」がいいのではないかというお話がありましたが、あの方々は基本的に「光村図書出版」がよろしいのではないかということです。

今のいろいろなご意見を伺った中で、臼井委員としてはいかがですか。

○臼井委員 私は、2点を同じぐらいと言ったのは、それぞれいいところがあるのですけれども、それ以外の理由として、やはり国語の教科書は算数、社会、理科と違って非常に内容依存的です。例えば、算数の場合は、どこの教科書を使っても、基本的に扱う内容は同じですし、歴史の順番も変わるわけではないです。ところが、国語は、教材研究をするときに、例えば「ごんぎつね」であったり、「一つの花」であったりと内容主義なのです。そうしますと、先生としても5年や10年同じ教科書を使っていると、その教材研究の積み重ねができていくので、同じ教科書会社を使うことの強みがあるし、研究の積み重ねにもなります。その一方で、危険性もあるわけです。つまり、マンネリ化していく面もあります。

そんな両面も考えまして、もしも優劣がはっきりしていれば別だけれども、そんなところで決めかねているところがありました。ただ、全体として皆様のご意見を伺っていて、私は、何が何でも「三省堂」というつもりはありません。今言ったような趣旨も自分の判断の中にあったということです。

○山中委員長 池田光司委員はどうですか。

○池田（光）委員 冒頭にも申しましたように、本当にそれぞれ甲乙つけがたいと思います。特に、「三省堂」と、「教育出版」「光村図書出版」と二つに分かれるような気がして読んでいまして、「三省堂」は専門的なところがあって、そこが少しつらいかなと思いながら見ていました。

そして、全体で考えて加点していくと、やはり「光村図書出版」の評価が高いかなという気がしています。ただ、「教育出版」のさまざまな工夫も捨てがたいということも含めて、今回は全体で見て「光村図書出版」でよろしいかなと感じています。

○山中委員長 そうしますと、総合的に見た場合に、「国語」は「光村図書出版」がより良いかという方向性には皆さん大体ご同意いただけるかと思います。

札幌のことも出てくるところもありますし、教える立場に立つと、マンネリ化しないように工夫していくことは当然必要なことで、同じ教科書をいつまでもずっと続けることを考えなければいけない場面もあろうかと思いますが、この段階では、内容的な豊かさ、あるいはバランスのよさを考え、国語については「光村図書出版」の教科書を選定するという方向でいかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 では、そういうことにさせていただきます。

また、書写については、先ほどご指摘がありましたように、必ずしも同じ会社のものでなければいけないということではないのですが、「日本文教出版」の教科書をご推薦されたのがお一人、あとは基本的に「光村図書出版」です。

「日本文教出版」をご推薦された臼井委員、何かご意見ありますか。

○臼井委員 例えば、作文のための原稿用紙の書き方も「日本文教出版」にしっかり載っています。また、練習の成果が見えるということもありますけれども、それもたくさんの中のわずか小さなところにあるだけで、硬筆の練習ですからそれで十分足ります。それは、ある意味、教師の工夫で対応できると思います。

そうすると、私はこだわりたいのですが、書道の授業を見ていて、やはり後始末が悪い、姿勢が非常によくない、大人になって鉛筆の持ち方が不十分であるということが非常に多いです。そういう意味で、きちんとした学習もしついても徹底していることは、小学生にとって非常に重要ではないかと思っています。

これは、書道だけの話ではなく、そのほかの勉強でも、低学年の机の上を見

たときに、鉛筆、ノート、教科書をしっかり置いて、しつけがきちんとしている教室は、学力もしっかりつくのです。そういうことの基本訓練ということを考えても、これはなかなかよくできているなということです。

正直なところ、ものすごく大きな違いがあるかという、そんなに違いはありません。

○山中委員長 そうしますと、今、臼井委員が言われたような姿勢の問題などについては、教える教師の側として特に心してもらいたいということで、教科書としてどれを使うかということは、ほかの方々のご意見を基本として、「光村図書出版」にさせていただいて、現実には教科として指導していくに当たって「日本文教出版」のよさも取り入れていただくということでいかがでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 それでは、書写についても、「光村図書出版」の教科書を採用いたします。ただ、指導法について、札幌市教育委員会としてより充実を図っていくために、取り入れるところは取り入れていただくことをお願いしたいと思います。

選定としては「光村図書出版」とさせていただきます。

次に、社会と地図に進みます。

まず、社会については、7月30日（水）の審議において「東京書籍」と「教育出版」の2者を選定候補に挙げました。また、地図については、2者だけでしたので、「東京書籍」と「帝国書院」の2者を選定の候補としています。

この審議についても、まず、委員の皆さんから、これまでの審議、あるいは、教科書を自分でご覧になって、さらに質問したいことがありましたらお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

○池田（光）委員 「東京書籍」の情報モラルチェックシートがありますが、実際に授業でどういうふうに効果的に活用されるのかなと思っていたのです。その辺のところでは何かご意見がありましたらお願いしたいと思います。

○菅野研修担当係長 教科書をご覧ください。

実際には、そこにあるとおり、教科書の単元の最後の部分に、情報モラルチェックシートというものが「東京書籍」に載っています。これは、学習の最後に、実際に学習したけれども、自分自身を振り返ってみたときに情報モラルに関してどうか、特に15項目ありますが、それを一つ一つ自分で問い直して、今

の生活を振り返るという構成になっています。授業の最後に使います。

○池田（光）委員 現実的な感想が持てるというか、現実と即したような質問かと思って気になったのですけれど、子どもたちが読んでみて感じることは、こういうようなことなののでしょうか。著作権のこととか、その点をどう生かすとか、感想的なことが振り返る価値があるのではないかと思ったのですけれども、その辺はどうでしょうか。

○菅野研修担当係長 両者とも情報モラルは非常に大事に扱っています。昨今、情報に関するものの問題も起きていますので、教科書できちんと教えていく部分に関しては、両者とも出ています。

「東京書籍」については、自分自身のチェックシートがあり、その後に、次のページをめくっていただきますと、加えて情報活用について話し合うところがあります。そこが今まで学んだことをみんなで振り返るページです。そして、右のページになりますけれども、「情報活用宣言」ということで、自分たちで宣言をしていきたいと思いますというような発信型の流れになっています。生かすという部分です。

一方、「教育出版」も情報モラルは厚く扱っています。扱い方が少し異なりまして、そこにあるとおり、「深める」という場面ですが、情報ルールを考えようということで、学習の単元の終わりに、「私たちの情報ルール」ということで、そこにあるとおり学級みんなで話し合っ、教室に掲示しておいて、時々見直しながらつくり変えていくというように、日常生活につなげるような展開になっています。

○阿部委員 社会では、子どもたちが問題をどう解決するかも大きなテーマになっていると思います。その両者においての問題の解決の手法で違っている点があったと思うので、その辺の特徴をもう一度教えていただけますか。

○菅野研修担当係長 両者とも、問題解決的な学習の取り扱いについては非常に工夫しているところです。

まず、「東京書籍」に関しては、学習の進め方で、今見ていただいているところですが、これを全学年の最初の単元に必ず取り入れています。ここにあるように、「つかむ」「調べる」「まとめる・いかす」という構成の教科書になっています。

一方で、「教育出版」は、特に顕著なのは3年生の巻末になります。第3学年において「わくわく！社会科ガイド」というページを掲載しており、調べ方

や調べたことの記録の仕方、発表の仕方、地図の見方などの学び方の基礎・基本を提示しまして、学習に必要な技能の獲得を促すような内容になっています。

例えば、問題解決的な学習においては、大事なことで、まず、子ども自身が問題を持つという部分があるのですけれども、例えば「東京書籍」の5年生の上巻に稲作の学習があります。そこにおいて、左側には「つかむ」という部分があり、先ほど言いましたように問題解決的な学習において問題を持つ部分において、「つかむ」でどのようなところなのでしょうかということです。

次をめぐってください。

同じように「つかむ」と左上にあるのですが、そこで学習問題をつくり、学習計画を立てましょうというところで、みんなで学習計画を立てる、つくるところに重点を置いているページです。

さらに、その後ろのページですが、問題解決学習においては、まとめるという学習も非常に大事です。

例えば、「東京書籍」は、最後のまとめるという場面において表現活動を非常に重視しています。お米づくりの学習について、最後は、お米づくり辞典をつくろうというような形になっています。いわゆる多様な表現活動を通して考えを深めることを促すような構成になっています。5年生の工業の学習においては、日本の自動車づくりのキャッチコピーを考えようというような表現活動で終わるようになっていきます。

一方、「教育出版」は、5年生の下巻の情報の一番初めのページをご覧ください。単元の最初のページが1枚の大きな絵になっています。ここに非常に特色があるのですが、こうした1枚の絵から子どもの多様な考え、生活経験を引き出して、そこから自分ごとにして問題をつくるという工夫が見られるところです。

さらに、先ほど言いましたように、まとめるという部分ですが、「教育出版」は、キーワードを通してまとめていきます。言葉を入れるようなつくりになっており、最も特徴があるのは、ノートに書きあらわしましょうとなっていて、ノートを非常に重視している点があります。日常の授業との関連を大切に自分の考えを整理して見直すという意味では、日常の授業に生きるようなつくりになっています。

○山中委員長 今のお話を聞いていますと、問題解決的な学習の取り扱いに関して、2者で特徴が大変顕著かなというところですが、ご質問、ご意見はありませんか。

○池田（光）委員 もう少し教えていただきたいのは、アイヌの記述について、

特にアイヌ語の意味をしっかりとやっているのは「東京書籍」だったと思いますが、表現的なところなどのまとめはいかがでしょうか。

○菅野研修担当係長 「教育出版」「東京書籍」どちらも2ページずつ扱っています。そういう意味では、アイヌ民族の文化、暮らし、歴史を受け継いでいく、言葉にもありますけれども、先住民族という扱いはどちらも詳しく載っています。

○山中委員長 余り大きな違いはないということでしょうか。

○菅野研修担当係長 大きな差異はないと思います。

○池田（官）委員 これまで余り質問してこなかったことですが、震災復興や子育て支援といった今日的な問題についての記載について、それぞれ何か特徴がありますか。恐らく、それぞれ6年生の下の方という中で取り上げられるものだと思いますが、もし両者に差や特徴があれば教えていただければと思います。

○菅野研修担当係長 こちらも、どちらの者も非常に工夫されています。例えば、自然災害の部分は今回非常に厚くなった部分で、どちらも3・4年生の下の方から扱っています。

「東京書籍」の場合は、学年に応じて防災意識が高まっていくような工夫した構成になっています。

「教育出版」は、天災や身の安全の確保などを含めて学んでいくような構成になっています。今日的な課題については、社会の答申の14ページにあるとおり、6学年で、例えば「東京書籍」は「願いを実現する政治」において、ユニバーサルデザインを取り上げています。誰もが安心して幸せに暮らせるようなまちづくりを、公園などを例に詳しく記載しています。

「教育出版」は、バリアフリー法を掲載しており、こちらも人権を尊重するような学びができるようになっています。

○山中委員長 ほかにありますか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 なければ、今のいろいろなご意見、これまでの審議、教科書を

お読みになってのご自分なりの分析を踏まえて、各委員の意見を伺っていきたいと思います。

まずは社会について伺って、次に地図について伺うことにしたいと思います。

池田官司委員からお願いします。

○池田（官）委員 私は、「東京書籍」の教科書を推したいと思います。

これまでの質疑の中から、社会の教科書を「教育出版」と「東京書籍」で記載されている内容そのものには大きな差というものはないと認識しています。ただし、先ほど阿部委員のご質問の返答の中にあるとおり、問題解決的な枠組みの記載の仕方にやや特徴があると思いました。特に、「東京書籍」は、各単元の最初のほうで、いわゆる問題発見、問題解決ということにつながるような記載がより丁寧になされている印象でした。特に6年の上に歴史があると思いますが、そこでの年表の見方とか歴史というものをどう学んでいったらいいのかというあたりの外枠の学習の仕方についての記載が「東京書籍」のほうがやや丁寧であるような印象を持ちまして、札幌市の教科書としては、もちろん微差ではありますが、よりふさわしいのではないかと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私も、「東京書籍」がいいと思います。

理由は、先ほどの問題解決的な学習の取り扱いで、内容についてはどちらも変わらないのですけれども、その扱い方が「東京書籍」はすごく丁寧だと思った点があります。例えば、「つかむ」「調べる」「まとめる・いかす」という三つの項目が、大変めりはりがあってストーリー性を感じる点がありました。

「つかむ」はオレンジ色を使って、「調べる」は緑色を使っていて、「まとめる・いかす」は紫色を使っていて、わかりやすいところと、調べるときにも調べ方の計画の立て方に注力を置いてやっているところがありました。その点が非常にいいなと思いました。

また、さまざまな人に取材した記事なども載っているのですけれども、特に、前回もお話しさせていただいたように、北海道の方の顔写真を使って、子どもたちが同じ北海道の方が登場していることにおいても親近感が湧くのではないかと、いろいろな点からそのように感じました。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、池田光司委員、お願いします。

○池田（光）委員 私も、「東京書籍」を推薦させていただきます。

皆さんがおっしゃったように、問題解決的な学習の扱いについては、全体を通して、本当に丁寧にきめ細かく、また深みもあるところに向かっていっていると感じています。

また、「子育て支援の願いを実現する政治」というところも非常に具体的事例に基づいて書いてあります。「教育出版」もそうですが、さまざまなことがより具体的で、いろいろな人たちや場面の写真もあり、全体的に社会の勉強に非常になじみやすいようなイメージがあります。それで、「東京書籍」を推薦したいと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

それでは、臼井委員、お願いします。

○臼井委員 私は、意見が違って申し訳ないのですが、「教育出版」と「東京書籍」とほとんど差がありません。

理由を申しますと、例えば5年生の地域の問題は「教育出版」のほうが北海道についての取り上げ方が多いことがあります。例えば、アイヌの暮らしについては「東京書籍」と同じ2ページありますが、6年生の下を見ると「教育出版」では萱野氏の国際連合での演説の小さな写真があります。やはり、今日のいろいろな問題とアイヌの歴史の問題をつなげて考えるという意味でも大事なことであろうかなという点で、地域のことを考えると「教育出版」がよくできていると思いました。

その一方で、6年生の教科書を見ていて、「わたしたちの生活と政治」は、「東京書籍」は下で、選択が出ますけれども、川口市を例にして子育て支援の問題を取り上げ、震災復興では気仙沼市となっています。これは、両方とも非常に詳しいです。なおかつ、「原子力発電所事故からの復興」について1ページ掲載しているのは、「東京書籍」だけです。また、各国の問題で、子どもの視点からアメリカの学校、中国の学校ということが非常に詳しく書いてあります。「教育出版」もあるのですが、こちらは「東京書籍」のほうがより詳しく具体的に国の関心、あるいは、日本との違いという国際的な視点を非常に容認しています。あとは、憲法をめぐり平和の問題に対するスペースも「東京書籍」が多いです。

ということで、現代のことを考えると「東京書籍」となりますが、地域、北海道だけ考えると関連するのは「教育出版」のほうが大きいというところで、二つ並んでいました。

○山中委員長 それでは、町田委員、いかがですか。

○町田委員 私は、「東京書籍」を推したいと思います。

理由は、先ほど問題解決的な学習の取り扱いを「つかむ」「調べる」「まとめる・いかす」といった枠組みで教科書がつくられているとありました。問題解決的な学習、課題探究的な学習は、教育委員会としてはこれから開成中等教育学校でバカロレアの教育プログラムを導入していくのですが、課題探究的な学習、学び方を子どもたちが受ける中で、社会科で「つかむ」「調べる」「まとめる・いかす」という形の学び方に基づいて、常にそういう手法を意識するという観点から、「東京書籍」のものが社会科の教科書としてふさわしいのではないかと考えます。

○山中委員長 ありがとうございます。

問題解決的な学習の取り扱いあたりで考え方が多少違うところもあるのかなという気がいたします。

最初に、社会を決めましょう。

今、臼井委員からご指摘のあったような甲乙つけがたいあたりについて、皆さんのご意見はいかがでしょう。

地域的なところを取り上げている関係では、特に「教育出版」がある意味では北海道の基幹産業的な水産業について非常に詳しく述べています。「東京書籍」は、その点が少し手薄かなというところあります。ただ、皆さんのご指摘のように、全体的に問題解決的な学習の取り扱いというあたりでは、「東京書籍」のほうが多少いいというご意見も強いところかと思います。その辺についていかがでしょう。

もう一つは、社会の教科書は、今まで発行会社が一度もかわったことがありません。皆さんの今のご意見は、基本的には教科書をかえてもいいのではないかということにつながるわけですが、その辺については何かご意見ございますか。

○池田（光）委員 長年の教科書の出版社をかえることは、授業をする先生たちの戸惑いや子どもたちの戸惑いは相当あるものではないでしょうか。余り大きく変動するような事例はなかったのですけれども、何か感想でもあれば述べていただきたいと思います。

○菅野研修担当係長 両者とも、現行の学習指導要領に基づいてつくられていると思いますので、大きな混乱は生じないと思います。ただ、社会科の場合は

教材研究に時間がかかると言われていますので、教育課程編成の手引の充実もしっかり図りながら教育委員会としてしっかりやってまいりたいと考えています。

○山中委員長 臼井委員としては、甲乙つけがたいというお話ですが、どちらかの教科書になった場合に、実際に教えていく上での配慮の点について何かお考えはありますか。

○臼井委員 前にも申したのですが、札幌市の場合は、副読本で「わたしたちの札幌」というものがありますので、今回はその辺と教科書の地域のカバー率の関連性も伺ったのです。ある意味で、きめ細かな地域のことはそちらのほうですね。

3年生からでしたか。

○菅野研修担当係長 3年生と4年生が使います。

○臼井委員 身近なところはそれでいけますので、ある程度はそちらでカバーできると思います。私は、むしろ、現在のいろいろな政治、暮らし、平和のことを考えるときに、「東京書籍」のほうの扱いが多かったと思います。

今までずっと同じ会社でやってきたからいい、悪いという話は全く別にして、現代あるいは今日の暮らしということを考えると、「東京書籍」のよさを評価していいのかなと思います。もし二つを強いて挙げればですが、そういうふうに思います。

○山中委員長 そうすると、地域性の問題は副読本あるいは教え方でカバーできるということですね。

○阿部委員 写真の使い方は、「東京書籍」は一つ一つがそのものに注目していて、写真から文字も読み取れるような工夫がされている点がありますし、最新の写真を使っているという印象も非常に強いです。子どもたちとしても、写真から読み取れるもの、イラストから読み取れるもの、文字だけではわかりにくいことがたくさんあると思いますが、そういった点においても「東京書籍」のほうが写真から読み取れるものが大きいのではないかと感じます。

○山中委員長 そのほかにご意見はありますか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長 そうしますと、皆さんのご意見としては、社会については「東京書籍」のほうがよろしいのではないかということになるかと思いますが、その方向でよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○山中委員長 理由としては、問題解決的な学習の取り扱いその他いろいろありますけれども、その辺はまたきちんとまとめることにしまして、社会については「東京書籍」を選定することとさせていただきます。

続いて、地図についてはいかがでしょうか。

池田（官）委員からお願いします。

○池田（官）委員 私は、「帝国書院」を選びたいと思います。

もちろん「東京書籍」のほうも、さまざまところが工夫されていて、そもそも版も大きくて見やすいところもあります。ただ、これは子どもの目線に立ってということと少し違うのかもしれませんが、「帝国書院」の地図帳は、やはり長年採択を繰り返されたり、伝統のある出版社であろうと思いますが、全体的な色合いや配置、地名の記載の方法が私は個人的に非常に目になじんで見やすいと思いました。

もう一つ、大きいのが北海道の地図についてです。「帝国書院」は、北海道については、4ページ見開きで取り上げているところが大きいと思います。「東京書籍」も、例えば九州などは4ページになっていますけれども、北海道が2ページであるところは札幌の子どもにとっては「帝国書院」のほうがより親しみやすく勉強しやすいのではないかと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私は、「東京書籍」の地図帳がいいと思っています。

同じように、北海道を見開きにして両方の出版社で扱っていらっしゃるのですが、サイズが大きい分、一つ一つの地名がはっきりしているところと、地名の色もかえているので、どこに何があるかが一目瞭然で、子どもたちにとっては非常に見やすくわかりやすいのではないかという点があります。また、それぞれのアイヌ語の地名、現在の地名も表現されている点もあります。そうい

った意味から、「東京書籍」の地図帳がいいのではと感じています。

○山中委員長 続いて、池田光司委員、お願いします。

○池田（光）委員 私は、「帝国書院」の地図を推したいと思います。

意図や目的が非常にしっかり書かれていると思います。例えば、最初のめくったところでも、「帝国書院」は同じ日本列島の眺めですけども、宇宙からの眺めです。子どもたちに宇宙を連想させながら日本に主眼をおいていくということで、「宇宙からの」という具体的な言葉からも感じ取れるものが大きいのではないかと思います。一方、「東京書籍」は、ただ「ながめてみよう日本のすがた」です。その辺のインプットする工夫は、「帝国書院」のほうがあるのではないかと思います。

また、領土問題にしても、思いっきり地図が出てきているところや問題になっているところを出しているのもなかなかいいなと思います。尖閣や竹島についても、あえて写真を入れながら明確にしていっています。全体的に明確に地図を見せていこうという意図があるので、そういう点がすごいと思って、「帝国書院」を推薦したいと思います。

○山中委員長 臼井委員、お願いします。

○臼井委員 私は、「東京書籍」を推します。

そのわけは2点あります。

一つ目は、大きいということです。地理の勉強をされていて楽しいのは、教科書に出ているところをどこにあるか探そうというときに、大きいスケールで見るとほうが学習が進みやすいということがあります。前回は伺ったら、子どもの目はいいので、小さくても大丈夫というご意見がありましたけれども、私は、個人的に地図が好きです。子どもたちから実際に見ていく上で、大きい地図のほうが楽しいです。それが一つです。

二つ目の理由は、「東京書籍」の巻末の資料の多さです。これは、社会科で勉強しているときに、後ろの資料で、工業、農業、あるいは、いろいろな問題についての情報をぱっと見られます。資料が豊かだということは、学習の発展につながる場所があります。

この2点により、私は「東京書籍」の地図を推します。

○山中委員長 それでは、町田委員、お願いします。

○町田委員 私は、「帝国書院」の地図を推します。

やはり、北海道が見開きで4ページにわたり掲載されています。地図は、「帝国書院」のものを使ってずっと見なれてきているということもあるかもしれませんが、感覚の問題ですが、「帝国書院」のものが読みやすいのかなという気がしています。

○山中委員長 さて、意見が分かれました。見やすい、見なれている、資料が多い、北海道に縁が深い、身近な地域を特に大きく取り上げているといった観点がいろいろあるわけですが、それぞれご自分と違う意見をお聞きになって考え直したり、または反論したいことがあろうかと思いますが、いかがでしょうか。

○阿部委員 そもそも、地図の使い方を教えていただきたいと思います。

○菅野研修担当係長 基本的には、社会科の学習において地名が出ていたときに、必ず地図帳で位置を確認するということがあります。例えば、北海道の学習が出てきたときには、地図を見て周りの地形の様子、気候、そこで営まれている産業、どういったものがとれているか、地域のことを詳しく学ぶという意味では社会科の学習において地図は非常に大事かと思います。

特に、4年生において北海道の学習があるので、北海道のページがふんだんに載っているのは重要な要素かと考えております。

○臼井委員 両方の地図とも少々改善していただきたい点があります。それは、国際的な視点です。アメリカに行って地図を見ると、日本は端に載っているのです。または、オーストラリアに行って地図を見ると、南半球、北半球が逆になって、日本は全く違って見えるのです。そういう意味では、もっと地図上で日本の地政学的なところを総体化するような工夫をしてほしい気がするのです。

その論点で考えると、確かに北海道のもので言うと4ページか2ページかがありますが、正しく言うと、道南・道央部が詳しいだけです。私のような道北出身の者からすると、やや不満となるわけです。ただ、ここは札幌ですから、道央で十分ではないかという論議かと思います。

要するに、この地図は、教室の中でいろいろな工夫でできることがあるし、果たして「東京書籍」に載っているものがミニマムとして不足しているものがあれば重大な問題ですけれども、見たところ、大きい、小さいという違いはありますが、そう大差がないと思います。そうすると、ある意味では、北海道、札幌の子どもは、北海道に詳しくなるだけでなく、やはり日本全国のいろ

いろなことについても知識を持ってほしいと思います。それが開かれた国際人としての札幌市と考えると、むしろ地域だけに縛られないことを考えてみても、大きいほうを推したいということです。

○阿部委員 今、地図の目的のお話をしていただいて、やはりそうだったのですけれども、「東京書籍」の場合は、一つ一つの文字が大きく出されている点からいくと、やはり場所を探すという意味では非常に探しやすいと感じます。最近、弱視のお子さんも増えているという話も聞きますから、そういった意味で、一つ一つの文字を考えたときに、もう一者の「帝国書院」の探しにくさを考えると、「東京書籍」の地図帳のほうがいいのではないかと私は思います。

○山中委員長 「東京書籍」をよしとする二つのご主張がありましたが、逆の側からはいかがでしょうか。

ご意見の数からすれば「帝国書院」を推される方が3人ですが、ただいまの意見の内容に対して、さらにご意見はありませんか。

○池田（官）委員 質問ですが、たしか資料の中で北海道にかかわる内容を扱っているのは、道の採択参考資料では「帝国書院」のほうが多かったように理解していたのですが、そこはどうでしょうか。

○菅野研修担当係長 確かに、北海道教育委員会を出している採択参考資料に載っているとおりかと感じています。

○山中委員長 先ほど、臼井委員から、「東京書籍」のほうが資料が多いというご意見がありましたね。

○菅野研修担当係長 後ろの統計のページに10ページほど差があるということだと思います。ただ、10ページというのも、いわゆる目次も含めた10ページになっていますので、そんなに大きな差異はないのではないかと考えています。

○池田（官）委員 資料の全体的なボリュームとしては「東京書籍」のほうが多いのかもしれませんが、北海道に関する資料ということを考えてみると、やはり「帝国書院」のほうが多いのではないかと私は思います。ですから、「帝国書院」をさらに推したいということになります。

○山中委員長 教育委員会会議としては基本的に多数決で決めるのですが、多数決でやるような事柄でもなさそうな気がします。もし私がこちらと言えば3対3になるし、あちらと言えば4対2になるところもあります。なるべくなら、こういう工夫をして、このあたりで決めたいという方向性が出ると一番いいと思っています。

○池田（光）委員 「帝国書院」の世界地図では、そのエリアの風景写真が必ず入っていて、その地域に親しみを感じるのではないかというのが私の推すところの一つです。たしか、「東京書籍」は、まとめて書かれていたような印象があります。余りなじみのない世界地図に幾つか写真が入って、非常に親しみを感じるころは大きな価値があるのではないかと感じます。

ただ、一方で、日本についてはそこのところがもう少しあってもよかったと思います。そこが気になるところです。しかし、世界に対しての写真が一つ一つ印象が残っていく非常におもしろい仕組みではないかと思っています。

○池田（官）委員 先ほどと同じお答えになるのかもしれませんが、地図帳こそ、長年使われてきているものがかわるのは、教科書よりもむしろ影響は大きいのかなと想像してしまうのです。地図は図ですから、比較的直感的なもので、児童の皆様は初めて見るものだと思いますが、出版社がかわると、これまで教えてこられた先生としては、直感的にここに出ていたという感覚がかなり大きく変わると思います。そういう意味で、社会の教科書と地図帳がどちらも一遍にかわってしまうことの影響を考えに入れる、入れないという賛否もあると思いますが、そこに関してはいかがでしょうか。もし全く影響なく対応していくのだということであれば、それはそれでよろしいのですが、いかがなものでしょうか。

○菅野研修担当係長 先ほどの教科書のときのお答えをつながるのですが、基本的には両者とも現行の学習指導要領に基づいてつくられていますので、それによって現場が大きな混乱が生じるということは考えづらいところではあります。地図ですから、今まで見てきた親しみ、例えば自分の地域への愛着、自分が住んでいる地域のことを詳しくわかるという意味において、地図は非常に重要な役割を果たしているのかなとは感じています。

○池田（官）委員 私が述べたようなことを言いますと、いつまでたっても同じような教科書を使わなければならないのかということになってしまうので、それもいかがなことかなと思いつつ、質問しました。

○山中委員長 私も、そういう感じがしないでもないです。そしてまた、臼井委員や阿部委員がおっしゃるような、世界に目を向ける、あるいは、世界の中の日本を考える、見やすさも大変理解できる、そういうところも考えなければいけないと思うところです。ただ、この委員会としてどちらにするか、最終的には多数の委員が賛成する方向で考えざるを得ないのです。

○池田（光）委員 私が先ほど申しましたように、日本に対する詳しさは、やはり「東京書籍」は非常にすぐれていると思います。最初からずっと迷っていて、もしかしたら私の気持ちも違って、日本に焦点を置いた地図からもう一回スタートしてみるのも手かなと思いました。

「帝国書院」も、日本のことを詳しく書いていないわけではないのですが、先ほどもあったように、少し見づらいところもあって、「東京書籍」のほうが見やすいです。日本の見やすさという点から、一回、「東京書籍」でやってみるのも手かなという気持ちもあります。

○臼井委員 今、社会科の教科書は「東京書籍」が採択予定になっています。例えば、5年生でいろいろな地域のことを扱うわけですが、その地域は、結構小さなまちもありまして、そことの対応でいくと、「東京書籍」の地図のほうが教科書と対応しやすいかなと思いました。そのあたりの対応はどうでしょうか。大きなところは、後ろの索引を見ても余り差がありません。

○菅野研修担当係長 特に必ずそろえなければならないということはないと思います。先ほど申し上げましたように、教科書で出てきた地名を調べるときに使います。また、地図帳は4年生から使うのですが、他教科においても、調べ学習において使うことがあります。必ずしも同じ会社でなければならないということはないと思います。

○町田委員 先ほど見やすいというお話を申し上げたのですが、なぜ見やすいかというと、やはり自分がこの地図で学んだこともあります。今、どの地図帳を選定しようかという議論をしていますが、中学生の地図帳は「帝国書院」です。中学生になると「帝国書院」のもう少し詳しいバージョンの地図になることを考えると、なれるという面でも「帝国書院」は捨てがたいと思います。ただ、そういうことを言い出したら、小学校と中学校を一貫して選ばなければいけないという話になるし、どうしたものかなと思っています。

○池田（光）委員 領土問題についての表現の違いはどうでしょうか。

○菅野研修担当係長 領土問題に関しては、前回の教育委員会会議でもありましたが、「帝国書院」の中に領空のページを起こしています。そういった意味で、小学校の段階でそういうことを知識としてしっかり学ぶという点では詳しく載っております。「帝国書院」は、領海、領土という言葉も詳しく図解をして示していることと、一番特徴的なのは、北方領土も含めて領土がある位置に写真が掲載されています。つまり、位置と写真が一致しているという点では非常に特色があり、子どもにとってはわかりやすいつくりになっていると思います。

○池田（光）委員 「東京書籍」は、領土については余り表現がないような気がしています。

○菅野研修担当係長 「東京書籍」の中にも、国の周りの地図が載っていますので、領土の範囲は日本全図の中であらわしているのですが、その位置と写真があわさって詳しく掲げている面、それから、図解の点が両者の違いかと思います。

○山中委員長 大体議論が尽きたと思いますが、明確にこれで行きましょうと言にくい状況であります。

そうなりますと、この委員会としては珍しく、ご意見の多いほうで決めさせていただくことにならざるを得ないかと思います。

臼井委員、阿部委員が言っておられることも大変よくわかる場所ですけれども、基本的に北海道の子ども、札幌の子どもにとっては、どちらかというところ、親しみやすいかなというところを押さえながら、「帝国書院」ということでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 よろしいとも言いきれないでしょうが、そのように決定させていただくことで進めさせていただきたいと思います。

それでは、社会については「東京書籍」、地図については「帝国書院」と決定させていただきたいと思います。

次に、算数について審議させていただきます。

算数については、7月31日（木）の審議において、「東京書籍」「教育出版」「啓林館」の3者を選定の候補としています。この3者の中から1者を選定することになります。

まず、これまでの審議を踏まえながら、また、皆さんそれぞれ教科書をご覧になって研究されたことなどをもとに、さらに質問したいことがありましたらお願いします。

○池田（光）委員 算数については、「啓林館」が非常に色合い豊かな工夫をされていると感じました。ただ、色合い豊かなことと算数のなじみは、一瞬そう思うだけか、それとも、継続的に学ぶ中で非常に効果のある表現なものでしょうか。難しいかもしれませんが、同じような数字が並ぶよりも、色合いがたくさん入っているほうが子どもたちになじみ深いのではないかという気がしているのですけれども、その辺は錯覚でしょうか、それとも、傾向としてあるのでしょうか。

○野田義務教育担当係長 「啓林館」については、非常に色彩豊かという話が先日の会議においてもお話があったところかと思います。しかしながら、どの教科書を用いても、子どもに対して算数的活動を行っていくということにかかわりましては、色彩ではなく、問題解決的な取り組みになっているか、もしくは、日常生活とのかかわりがどのようになっているかといった中身の部分が非常に重要になってくるかと捉えています。

○山中委員長 質的、量的に中身がほとんど同じであれば、色彩も採否に大きく影響してくるのかもしれませんが、中身をもっと議論する必要があるかもしれません。

中身のことで質問します。

採択参考資料などから拾った数字として、誤答の取り上げる数はどこが多いということが出てくるのですが、数が多いというだけではなくて、どういう扱い方をするのか、誤答に対して、子どもたちにどのように気づかせ、どのように指導するのか、子どもたちがそれを見てどういうふうに理解するのかというところを考えていかなければいけないと思います。その辺について、この三つの教科書での扱い方の違いはどうでしょうか。

○野田義務教育担当係長 教科書をお示ししながら説明したいと思います。

例として映させていただいているのは、5年生の小数の割り算です。

最初にお見せしているのは「啓林館」の教科書です。

2問出ている状況ですが、上の問題で、間違いについての説明例がしっかりと示されています。それをなぞることで、子どもたち自身は自分でも正しく説明できるようになっています。「啓林館」については、そのような特徴がある

と押さえています。

続いて、「東京書籍」です。

「東京書籍」も、同じ筆算の間違いですが、「東京書籍」は、子ども自身が間違いを見つけて正しい答えを求めるということで、筆算機能を正しく身につけられるように配慮されていることが特徴かと思います。「東京書籍」は、子どもがつまずきやすい誤答が非常に多く掲載されています。また、計算の間違いを少なくする態度を育成するという一方で、非常に問題数も多くなっています。計算上の誤答を取り上げている部分が多い特徴があります。

最後に、「教育出版」です。

同じく、小数の割り算になりますが、「教育出版」は、「説明しましょう」というところに非常に大きな特徴があります。間違いを説明しましょうということを通して、筆算を正しく理解しているかどうか、また、説明を通して筆算の意味を考えて、あわせて技能を高められるように工夫されていると思っています。説明するということは、説明することを通して、子どもたち自身がはっきりしないことが見えてきたり、見出してきたり、実はここがわかっていなかったのだということも含めて、自分に対して新たに問題意識を持たせる上でも非常に有効な手段で、効果的だと考えています。

○山中委員長 「啓林館」の場合ですと、「何々さんは間違いについて次のように説明しています」に対して、「教育出版」は、「この間違いを説明しましょう」と、アプローチが違うと思いますが、その辺は教え方の上ではどうなのでしょう。教えやすいのか、より問題解決的な学習ができるのか、そういった観点から見た場合にこういう説明の仕方の違いはどうでしょうか。

○野田義務教育担当係長 「啓林館」の特徴については、先ほど申したとおり、先の問題で思考の例が出ていますので、二つ目の問題を解決するに当たっては、それをなぞらえながら解決の糸口を見出すことができるかと思っています。

「教育出版」は、先ほど申したとおり、「説明しましょう」というものがこの教科書の中でたくさん用いられています。問題解決ということになりますので、子どもたちはこれを見たときにさまざまな多様な意見を引き出して、それをもとに、子ども同士、もしくは教師のかかわりの中で問題を解決していくということが求められるかなと思っています。

子どもたちから実際に示されたとおりではない考えが出る場合もあるかと思っています。そういった意味でも、それぞれも見通しを持てる、もしくは、子どもたちの多様な意見を引き出すというそれぞれの特徴があると思っています。

○池田（官）委員 数量関係の取り扱いについて、例えば、数直線を使う、比例、割合を使うということをこれまでもいろいろご説明をいただいているのですが、3者に絞られたところで、それぞれの特徴をもう少し詳しく教えていただけるとありがたいです。

○野田義務教育担当係長 例えば、線分図、数直線、面積図といったものについては、学びを支える手だてとして各者取り上げているところかと思います。教科書として、数量関係についてのアプローチの仕方に幾つか特徴が見られますので、それを説明申し上げます。

5年生の割合です。

前のページからスタートして何倍になりましたかということになってくるのですが、解決に当たっては、「啓林館」については、穴埋めの式を多用し、割合では中心的なとき方を二つ紹介して、子どもたちがこの穴埋めをしながら答えにたどり着きやすくしているということが大きな特徴かと思います。

「東京書籍」については、問題は違うのですが、問題がありまして、それにかかわって星1、星2、星3とついているかと思いますが、考えるということに対しての視点を示して、子どもたちが段階を追って考えていくことができるように促す工夫がされていると思っています。

最後に、「教育出版」です。

同じように割合の導入部分で、「東京書籍」と同じような場面ですが、見ていただくとわかるとおり、二つの考え方を取り上げています。そして、「考え方を説明しましょう」と書かれています。

全体を通してお話ししますと、「啓林館」は、先ほどのように穴埋めの式が多くあり、知識理解に結びつきやすくなっている印象があります。「東京書籍」は、説明が例示されているなど、子どもたちの考える方向性をある程度示して、見通しを持つことができるようになっているかと思います。「教育出版」は、考えるきっかけとなるようなヒントが最後に出ていたり、子どもたちの多様な考えを引き出したり促すようなつくりになっているので、考えることを非常に大事にしている、また、それが効果的に行われるような教科書のつくりになっていると捉えています。

○山中委員長 ほかにご質問などがありますか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 数学に関しては、問題解決の育成や、基本的あるいは基礎的な

知識等の理解が大きな特徴的な観点になろうかと思います。

この段階で委員の皆さんが札幌の子どもたちにとってどの教科書がより望ましいかということで、順次、ご意見を伺いたいと思います。

この点は、阿部委員からお願いします。

○阿部委員 3者とも非常に甲乙つけがたいというところで、まだ迷っている部分はあります。

今の段階では、「東京書籍」がいいかなと思っている点があります。それは、問題解決力の思考力、判断力、表現力を重視することを考えたときに、例えば、倍の見方や考え方がそれぞれの学年の段階で丁寧に取り上げているなという印象を非常に多く受けたという点がありました。

最初にも話題になりましたが、誤答の数が非常に多いというところから、その子によって間違えるポイントは違うと思うので、多く例として挙げていただいている点からして、今のところ「東京書籍」がいいと感じています。

○山中委員長 池田光司委員、お願いします。

○池田（光）委員 私も、「東京書籍」を推したいと思います。

一つは、全体を通して生活場面を非常に多く取り入れて、「やってみよう」や「使ってみよう」など、どちらかというと、間違いを出して気づかせることとか、苦手な子にもなるべく学ぶ持続力につなげていこうというところは、「東京書籍」が一步進んでいるかなと思います。最初に言いましたように、学ぶ楽しさみたいなものが生活場面から多く取り入れられているなということで、「東京書籍」を推したいと思います。

○山中委員長 次に、臼井委員、お願いします。

○臼井委員 私は、今までの教科書は迷っていたのですが、これは悩みなく「教育出版」を推したいと思います。

その理由は、算数は、手続的知識と我々は言うのですが、要するに、やり方主義でこうなるとこういう正答になるというようになっていて、それを一番徹底しているのが「啓林館」で、説明が割と浅く、その分はドリルをやって重ねようということです。ですから、ある程度できる子どもはこれで問題ないと思います。ところが、基礎力が弱い子どもにしてみると、なぜこうなるのか、また、特に小数の割り算のときにすぐ桁ずれをやってしまいますが、そういうことを筆算で丁寧に扱っています。いわゆる算数的な考え方を徹底して、筆算を

丁寧に扱っています。これは、5年生の教科書を見ていただくとはっきりしていますけれども、「教育出版」が一番丁寧です。

また、最初の扱いです。例えば、4年生の関数は、いろいろな長方形をつくりましょうということで、幾つかのところでおもしろく、5年生では地図的な経路でもってやっています。そういうように、子どもたちの活動につながっていくような、興味のあるようなアプローチをしています。

残念ですが、札幌の子どもたちは、特に小学校の段階では算数が余り得意ではありません。そうすると、算数的な物の考え方をしっかりつけて、筆算などの活動を入れて理解重視というようなアプローチを考えると、「教育出版」がほかのところに比べて一步上を行っていると思います。

なおかつ、算数が得意な子どもにとってみると、それぞれのところでやっていますが、「算数ワールド」はかなり発展的な内容を含んでいます。算数は、どうしても個人差が大きく出ますから、問題の中でもレベル分けをしていて、基礎的なことをやる人と、さらにもっと余力のある人は「算数ワールド」で遊ぶというような工夫をしてあることから見て、僕は「教育出版」を推します。

○山中委員長 ありがとうございます。

池田官司委員、お願いします。

○池田（官）委員 私も、「教育出版」を選びたいと思います。

算数の教科書に関しましては、この3者を拝見させていただきますと、それぞれ非常に特徴が際立っているような気がしました。「啓林館」の教科書は、前にもご指摘がありましたが、比較的生活とつながっている印象がありますし、「東京書籍」は、なるべくわかりやすく、理解しやすくという面があるように思います。その中で、「教育出版」は、算数的な思考法というのでしょうか、考え方の筋道を示しているように思いました。

そういう意味では、「教育出版」の教科書が一番難しい面があるかもしれないと思います。ただ、難しいというのは、言葉を変えると、それだけ深いということであって、私は専門家ではないのですが、算数の本質に近づこうということがあるような気がしました。

私なりにそのように3者の特徴を捉え、その中で算数的な思考ということについて一番特徴がある「教育出版」を選びたいと思いました。

加えて、「はってん」ということに関して先日の会議でもご説明があったのですが、発展的な問題に関して、これも強いて言えばというレベルでしょうが、「教育出版」が一番豊富です。それも、「教育出版」を挙げさせていただいた一つの理由でもあります。

○山中委員長 ありがとうございます。

町田委員、お願いします。

○町田委員 私も、「教育出版」の教科書を推します。

臼井委員と池田官司委員と考え方は同じですが、解き方のきっかけを示して解き方を考えて、その説明することへの見通しを持ちやすくする。例えば、台形の面積を求めるところが5年生の下であります。「東京書籍」では45ページ、「教育出版」では194ページに出ています。考え方をきちんと示し、そして、解き方を考え、説明することへの見通しを持ちやすくするという意味では、考え方重視といいいましょくか、問題解決力重視というようなことには、「教育出版」のほうが配慮しているのかなという気がしました。

○山中委員長 ありがとうございます。

算数も分かれたようですが、さらに、それぞれの考え方に対しての質問、あるいは意見等がありましたらお願いいたします。

池田光司委員、阿部委員から何かありますか。

○池田（光）委員 先ほど、誤答が少し取り上げられましたが、誤答が多く掲載されているのは、教える側の展開としては価値が出てくるもののでしょうか。最初から誤答だとわかってしまうと、答えが先にあるような気がします。算数の展開力やきっかけが大事ではないかというところが非常に気になっていたのです。

○野田義務教育担当係長 先ほど、委員の皆様から、算数というのは好き嫌いがある教科という話がありましたが、子どもたちは、わからなくなってくることが積み重なっていくと、当然、算数が嫌いになったり、苦手である、つらいということになってくると思います。通常、わからないことが積み重なっていくと、子どもたちは、何で間違っているのか、また、それを解決する手だてを見失ってしまい、それがまた大きな問題なのかなと思います。子ども自身が問題をしっかりと捉えて認識して、その解決方法を示していくことが大切かと思います。

誤答の取り扱いについては、各者に特徴があります。例えば、先ほどの話題に上がりました台形ですが、これは「教育出版」の誤答を取り上げているものです。台形の向きを変えています。向きを変えるだけでも、やはり概念がしっかり身についていないと、ここに書いてあるように、上底、下底というものがいわゆる位置的な上下だけになってしまっていて、このような誤認識が生じること

になります。こういったことは、現場においてはさまざまな部分で多々あるかと思います。こういったことを子ども自身も気づくことができることと、教師にとっても教科書は教える視点の一つにもなるかと思います。教師にとっても、こういったことに気をつけて指導しなければならないということの一つの示しになるかと思います。多ければいいということではないのですけれども、ポイントを捉えて誤答が示されているということは非常に大切なことかと思います。

○山中委員長 ただ、「よくあるまちがい」という形で書く場合に、単純にこれを間違えだよということを書いているだけというのが多いような気がしたのです。それだと余り意味がないのではないか。先ほどのように、「考えてみよう」とか「この間違えを説明しましょう」というふうに考えさせるものでないと、これは単純に言葉の意味を説明しているもので、ほかにもたくさんあったように思いますけれども、こういう間違いがよくありますよと書いてあるだけでいいのかということが気になったのです。

○野田義務教育担当係長 先ほど、3種類の教科書の誤答を取り上げている部分をお示ししました。今お示ししたのは、「よくあるまちがい」というコーナーの一つで、例えば先ほどお見せした「教育出版」については、全ての領域について誤答を取り扱っています。算数は、四つの領域に分かれているのですが、「教育出版」は全ての領域について誤答を取り上げています。もちろん、さまざまな誤答はあるのですが、その中でも実際に子どもたちがよく間違える点を「よくあるまちがい」としてピックアップして、コーナーを設けて紹介しています。したがって、誤答を全部、こうですよと示しているわけではありません。

また、「東京書籍」についても、子どもがつまずきやすい誤答は、先ほど委員の皆さまからあったように数多く掲載されています。特に、その中でも、計算上の誤答を取り上げている部分が多くて、正しい計算に基づくようにという配慮があると思います。

また、「啓林館」についても、誤答を取り扱った内容があります。また、説明例が示されていますので、子ども自身がそれをなぞりながら理解を深めていくというようなつくりになっていると思います。

○臼井委員 今のお話で思い出したのは、平均の扱いのところですか。これは、「東京書籍」も「教育出版」も両方あるのですが、サッカーの試合をやって、0点のときもあったと。そのときに割るのを試合数でいくのか、0点はゼロだからカウントしないでいくのかということのを両方とも扱って、2人の吹き出し

でやっています。

今回の教科書の特色だなと思ったのは、やはり言語活動を全ての教科に入れようということが徹底していて、今までは手続的なところを淡々とやるのに対して、やり方について子どもたちがある意味で討論するような形で教科書に取り上げられています。その中で、サッカーのゲームについて、0点をカウントするかしないかが非常におもしろいと思って見ていました。これは、平均の考え方ですね。

○野田義務教育担当係長 今、画面に映っているのは、「教育出版」です。

二つの考えを取り上げています。今回は、どちらが正しいのでしょうかということで説明を促して、左の考えと右の考えがあります。この画面に出ているものについて、子どもたちなりの考えの根拠を示しながら、実際に正しい平均はどうか、また、右下に少しだけ考えるきっかけを5試合の平均だからというふうに示しながら、考え方を説明するような工夫がされていると思っています。片方は明らかに間違っているのですが、考え方の比較を通して平均に対する見方、考え方を正しく捉えられるように工夫されています。

また、今まで、教育課程の中で平均が小数になることがなかったのです。得点は1点、2点、3点ですが、ここで初めて小数になるということが出てきます。サッカーの点数では小数はないのですが、平均をとったらそういうこともありますよということまで気を使って書いていることが特徴かと思います。

「東京書籍」は、5年の下の6ページですが、同じようにサッカーの試合です。こちらは、2人の考え方について話し合いましょうということで、これも片方の誤答を含めて二つの考え方が取り上げられています。そして、吹き出しも活用して、理由の主たる原因をヒントとして示しながら考えを整理して、平均の見方や考え方を正しく捉えられるように工夫されています。また、ここでも同じように、小数であらわせないものも平均なら小数であらわすこともありますよというところを示しています。

「教育出版」と同じようなつくりですが、片方は、どちらが正しいですかと説明を促しています。もう片方は、話し合いを促しています。「教育出版」は、考えの根拠が示された上でどちらが正しいですかということです。「東京書籍」は、吹き出しを通して、考える視点を示しながら、平均の意味理解を図るようにしているという特徴があるかと思います。

「啓林館」については、先ほど説明したとおり、穴埋めで示すことで、計算式が示され、冊数がゼロの日も日数に入れるのですよということを示しています。

○山中委員長 こういうゼロの場合も入れますと言い切ってしまう。「東京書籍」は、これこれの目的のときには0点の試合も含めて考えますと書いてあります。違いがありますね。「教育出版」は、結論的には全体の平均を求めるときはゼロの場合も含めて計算しますと書いてあります。ただ、その前のところで、ゼロを含めないで考えるというのと、得点を全て出すという2つの考え方を出しているわけです。そういう意味で、それぞれ考えさせ方が違う、あるいは、こういう場合はこれでいいのだという形で書いてしまうのは、算数教科書のつくり方の3者の違いを感じたのですが、現場で教えるときにはその辺はどうですか。

○野田義務教育担当係長 つくりの違いについては、おっしゃるとおりだと感じています。この場面においては、平均のゼロを含むか含まないかがポイントになっているところだと思いますが、やはり、実際の授業の場面においては、そこが必要か必要でないのかについては、平均にとっての意味理解にとって非常に大切な部分になります。ですから、子どもたちが思考を深めて、それを子どもたち自身に見出していただくような算数的活動が望まれるかと思います。

○山中委員長 ご意見としては、「教育出版」の考え方、つくり方を推す方が3名、「東京書籍」が2名ですが、さらにご意見はありますか。

私の考え方を多少申し上げれば、基本的には、「教育出版」のほうが丁寧に子どもたちの考え方を引っ張り出すように努力しているという気がします。ただ、それぞれがそれなりにできてはいますので、なかなか簡単に決めにくいところではあります。

○池田（光）委員 確かに、解き方のきっかけについては「教育出版」のほうがすぐれていると思いますし、そういう工夫は大きいという感じがします。

一つだけ、重ねてになるかもしれませんが、教える先生側からすると、「教育出版」のほうが丁寧過ぎてどうかなというのが気になっているところです。

○野田義務教育担当係長 例えば、先ほど話題に上がりました台形は、同じように左側が「教育出版」で、青色が「東京書籍」になります。「東京書籍」は、考える視点も段階を追っており、「教育出版」はきっかけになる吹き出しがあって、「東京書籍」は式が書かれているのですが、「教育出版」は式が書かれていません。要するに、式そのものも意味理解を図るために大切なところです。ですから、それも子どもたちに考えるように促しています。

子どもたちも、さまざまな回答を持っていて、例えば、この問題がわからな

いない子どもはどうやって数えるかという、一つ一つまずに区切って、この考えは三つではなくてもっとまずに区切って面積は何ぼだというふうに取り組みます。そういったときに、考え方が示されていて、それに乗っかるのもいいかもしれませんが、本当にわからない子どもにとってみると、まず、自分の考えを持って、実際に取り組んでみて、面積はこうだということで考えを持つことまでは子どもたちでもできる、まずは取り組むことができるということです。

授業の中でどちらかということについては、教師はどちらの展開もしなければならぬのですが、教科書としての特徴を挙げるとするならば、そのように子どもたちの思考を促して引き出すようなつくりになっているか、もしくは見通しを持たせて取り組むことができるようになっているかという特徴がこの2者にはあるかと思います。

○山中委員長 大体4年生から5年生ぐらいから算数がわからなくなるという時期があり、札幌の子どもたちは算数の思考をしていくところが少し弱いと言われてるだけに、ある程度、説明を丁寧にするほうが望ましいのではないかということが私の個人的な感想です。

○池田（光）委員 そういう意味では、札幌の実情に合っているかもしれませんね。

○山中委員長 私の感想を100%お認めいただかなくても結構ですが、そういう感想をお持ちになる方もいらっしゃるのではないかという気もいたします。

そんなことでまとめさせていただいて、算数については「教育出版」とすることでご了解いただけますか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 大分時間もかかりましたが、10分休憩させていただきたいと思います。

〔 休 憩 〕

○山中委員長 それでは、会議を再開いたします。

次は、理科について審議を行います。

理科については、7月31日（木）の審議で、「東京書籍」「教育出版」「啓林館」の3者を選定の候補としていますので、この3者の中から1者を選定す

ることになります。

前回の審議を踏まえて、また、皆様それぞれ検討されて質問もあろうかと思っておりますので、質問がありましたらお願いいたします。

○町田委員 理科という教科も、課題探究能力というか、問題解決能力を育むことが非常に重要だと思いますが、そういう観点でもう一度、「東京書籍」「教育出版」「啓林館」の教科書の特徴を改めて整理していただきたいと思います。

○小林指導主事 まず、「東京書籍」ですが、6年生の教科書を示させていただきます。

6年生は、最終段階として水温について行っていくことになります。その際に、「東京書籍」では、こちらに集気瓶の図があります。このように図を使い、また、子ども自身が図を描きながら見えないものを推論していくことに特徴があります。これは、ほかの単元にも見られるところです。

続いて、「啓林館」の同じ単元です。

また、ここで、中の空気の変化について推論する際に、「話し合い」というところにあるように、実験の結果を自分の予想と比べて考えたことを話し合います。そもそも、自分がどう思っていたか、ここを思い起こしながら実験の結果について判断していくところが特徴になっています。

続いて、「教育出版」の同様の場面になります。

「結果から考えよう」ということで、同じような考察の場ですが、下のダイヤの四角も話し合うとされているのですが、「教育出版」の特徴としては自分の予想と比べてどこが同じでどこが違っていたか、複雑な事象を考察しますので、全てが違うということではなくて、部分的に子どもの予想が合っていたり、また、それとは違ったりします。そういったことで、事象を振り返り、自分の考えの妥当性を見つめ直すといった特徴があります。

これら3者の特徴は、札幌市の子どもの課題になっている平成24年度の学力・学習状況調査の中で、自分の考えを振り返るところに対応する特徴となっていると考えます。

○池田（光）委員 「教育出版」では、時計台かどこかのつららの写真がありました。あの教材は、どのように生かせるでしょうか。

○小林指導主事 つらはは、たしか時計台の軒下のつららというところで扱われています。

こちらは、「教育出版」で、単元の導入ということで、実際にそこから子ど

もが単元の学習で何を考えていこう、何を疑問に持つか、そのきっかけとなる事象として札幌の時計台の軒下のつららを扱うことによって、子どもがみずからの生活の中に問題があるのだとこれから考えていく下地となります。先ほどの話にもありましたが、問題解決の一つの下地として、問題をつかむところでの生かし方があります。

また、各者、きっかけをつかむ事象ということで具体事象を使っています。

こちらは「東京書籍」ですが、学習の途中、最後のほうで学んできたことが、例えば水蒸気が冷えることによってこのような姿に変わるということで、ここでもまた、生活の中に学習したことが示されて、そこで考えていくことができることを示すのが特徴になっています。

「啓林館」では、北海道札幌とは違う地域のことになりますが、このように、冬に見られる自然事象から単元を導入するという工夫がされています。

○池田（光）委員 四季との関係の教材は幾つかの分類がありますか。四季を取り入れたような教材で工夫されているものはありますか。

○小林指導主事 四季の教材ですが、札幌はほかの地域とは違い北国ということで、雪の扱いが重要になると考えます。

例えば、「東京書籍」では、このように1月と示されていますが、同じ1月でも地域によって様子が違うということを扱っています。

もう一点は、学年は離れるのですが、「教育出版」です。例えば、植物の成長ということで、アブラナを取り上げて、北海道、札幌ですと雪と植物が同時に見られるといった光景が見られます。こういったことも扱っているところが特徴となっています。

○池田（官）委員 採択参考資料などで、安全の事故防止への配慮が示されている箇所が出ていたと思います。数字だけではなく、それぞれの記載の仕方に特徴があるかどうかについてはいかがでしょうか。

○小林指導主事 こちらは、3者を挙げさせていただきます。

主に危ない加熱器具がメインになってくると思いますが、「東京書籍」では、4年生の巻末から理科室の扱い方に続いて、これから5年生で扱うことになるガスコンロなどの加熱器具の使い方を巻末にまとめて掲載しています。

「啓林館」では、これは理科室の使い方の例で、この後に加熱器具も載ってまいります。初めて加熱器具を使う単元の直前に載せることで、適時、指導できるような内容となっています。

続いて、「教育出版」に関しては、「啓林館」同様、初めて加熱器具を扱う単元直前に、理科室、加熱器具の使い方を載せるとともに、前回、阿部委員からご指摘もありましたが、巻末の後ろの裏表紙にそれぞれの学年で特徴的な気をつけなければならない「安全の手引き」を掲載して、閲覧しやすいようにという工夫がされています。

○池田（官）委員 それぞれの教科書で特徴はありますが、内容的にはそれぞれ十分記載されているものだという理解でよろしいでしょうか。

○小林指導主事 箇所数が多いところは目に触れることが多いということ、安全が何か困るときもありますので、目に触れることが多いことがありますけれども、扱っている内容の要素としてはきちんと検定を通過しており、必要な安全上の配慮はされています。

○山中委員長 実験の仕方は、各者で結構な違いがある気がします。例えば、振り子の実験にしても、川の流れの実験にしても大分違うなという気がしたのですが、その辺は指導する教師の立場から見てどうでしょうか。

○小林指導主事 今、具体的な単元を上げていただいたので、指導の仕方の違いがあらわれている特徴的なところを説明します。例えば、川の流れは、実際に子どもが川をつくって、その流れによって土地がどう変わっていくかを学ぶ学習になっています。

こちらは、「東京書籍」です。例えば、傾きとか水の量を変えて水がどのように土地を侵食し、それがどのような水の速さをじっくり観察することで学んでいくような実験の方法になっています。

「啓林館」も、自分で河川の流れのコースをつくって流してみても考えていくことになっています。ただ、「私の工夫」というところで、流れの速さを見るために旗を立てるとか、チョーク、カラーサンドを流すといったヒントも載せられています。

続いて、「教育出版」では、このようにおがくずを流す、また、どのくらい削られるかを見るために旗を立てることがメインの実験として載せられています。このような点は、子どもが実験結果を明確に捉えることでは、非常によい工夫かと思いますが、子ども自身が実験をして結構迷うこともあります。そのときに、結果が一つはっきり客観的につかめることは指導上有効なことかと考えています。

○山中委員長 振り子の実験で大分違いがあるように思いますが。

○小林指導主事 「啓林館」の振り子では、振り子の1往復の時間を変えるために、この単元では子どもが調べていく要素として大きく三つ扱います。糸の長さ、振り子のおもりの重さ、振れ幅、角度です。「啓林館」では、このように一つにまとめてこのように扱って実験をしていくことになります。これは、上から下に向かってやっていくのか、全てを同時にやるのかは、指導する側の判断になると思います。

それでは次に「東京書籍」です。このような実験器具を使い、このような違いを調べていくことを明確に図示しながら実験を進めていきます。そして、実験1、2、3として順序立てて調べていくような構成になっています。

そして、先ほどの「啓林館」も「東京書籍」も同様ですが、3回調べとなります。1回、1回が10回振って平均をとるのですが、それをさらに3回で平均をとった値で考えていくといったような実験の手順となっています。

では、「教育出版」です。先ほどの「東京書籍」と同様に、実験の1のA、B、Cと分けております。ただ、「教育出版」の場合は、上にA、B、Cのどれから調べてもよいという注意書きが書いてありますが、順序立てて載せています。もう一つの特徴としては、こちらの実験器具です。こちらは、釣りのおもりとなっていて、先ほどの「啓林館」と「東京書籍」では、こちらのようない実験用のおもりを使っています。こちらを使っているのは、先ほどのおがくずと同様、時間のずれが少なくなるという特徴がありまして、そういった配慮も見られます。

○山中委員長 回数の違いはどうか。

○小林指導主事 回数ですが、こちらは5回はかることになっており、5回の平均はとりません。一回一回の値をグラフに位置づけて考察していくような展開となっています。この点は、例えば、大きくずれた値が出たときに、そのずれが埋没しないといった特徴もあります。

○臼井委員 一つお伺いしたいと思います。

例えば、水路の水の流れの授業を何回か見たことがあるのですが、これはなかなかうまくいかないで、学校によっては水の流れをコンクリートでやる場所もあるのですが、実際にはうまくいきません。なぜかという、意外と変数がさまざまなのです。砂場でやると、砂のちょっとしたやわらかさの違いでうまくいきません。

私の疑問は、これは教室でおがくずを使うことになっています。これは、例えば置戸町とか足寄町に行けばおがくずが入手できるでしょうけれども、札幌でこれをやろうとすると、おがくずが現実的なものなのかということ伺いたいと思います。

○**小林指導主事** おがくずを活用する際には、3年生の図工の学習でのこぎりを使う単元があります。あとは、5年生で糸のこを使う単元があります。そういったところに出てきた木くず、おがくずをためておいて使っているのが現状です。それを捨てないで使っています。

○**臼井委員** 現実には、湿気によってかびが生えたり虫が湧くので、後の保管管理が大変ですし、これだけ集めるといったら1学級、2学級程度のものでは現実的に集めるのがなかなか大変かなという素朴な疑問がありました。

○**山中委員長** ほかにいかがですか。

(「なし」と発言する者あり)

○**山中委員長** 特になければ、この段階で、これまでの審議あるいはお調べになったことなどを踏まえて、皆様のご意見を伺おうかと思います。
今度は、池田光司委員からお願いします。

○**池田（光）委員** 私は、「教育出版」を推したいと思います。

特に、問題解決は、ろうそくの実験で、自分の予想と差異や共通点を細かく見出だしていこうというところが随所にあらわれているような気がします。そのことがとても丁寧だなと思いました。

もう一つは、先ほど言いました時計台のつららも非常に身近な課題を取り上げて興味を持つ工夫をされていると思いました。

あとは、北海道の写真が非常に多く掲載されています。やはり、理科は、身近に感じれば感じるほど興味を引くところに工夫がされているという幾つかの点で「教育出版」を推したいと思います。

○**山中委員長** ありがとうございます。

続いて、臼井委員、お願いします。

○**臼井委員** これも、大変困っています。「教育出版」と「東京書籍」はよい

ところが違うので、なかなか比較しにくいのです。

「教育出版」のいいところは、地域のもものが割と多いことです。例えば、5年生の発展的な学習として、「石狩川と人々の暮らし」が2ページにわたってあります。札幌の小学校ではサケを育てるとか、恵庭のトマトの農場とか、地域のもが多いということがメリットです。あとのメリットは、実験がかなり詳しいです。例えば、電気の問題で、5年生の140ページあたりを見ても、ほかのところに比べると手続が非常に細かくて、コイルの巻き方でどうするかも1回目、2回目、3回目、4回目、5回目ということで、観察したことの累積データがとれるようになっています。あるいは、振り子の実験も詳しいのです。これは、よいところです。

しかし、そのよいところは、裏を返すと、デメリットになる可能性があります。つまり、「東京書籍」は逆で、「教育出版」のメリットがデメリットになっています。「東京書籍」の教科書を見ると、よいところは実験の手続が物すごくシンプルなのです。非常にわかりやすいところがあって、これは、どれもすばっと書いてあってわかりやすいです。そこで、例えば、理科の得意な先生が授業をやるとなると、「教育出版」のようなかなり詳しいことをやるのは、先生の力を発揮します。その一方で、高学年の理科になってくると、必ずしも皆さん理科が得意だとは限りませんので、マニュアル的にシンプルに書いてある「東京書籍」がいい点があるかと思います。

やはり実験は理科をおもしろくさせるために一番重要なポイントだと思います。理科がおもしろいという人は、実際に身近なもので実験します。また、大人になると難しいのですが、因果関係を推測するときに、我々で言うと、何が独立変数で何が従属変数であるか、つまりコントロールする要因が何であるかをしっかり見きわめた上でどういう結果が出てくるのかという因果的推測をします。そのところをシンプルに書いてあるのが「東京書籍」で、かなり詳しく書いてあるので得意な先生が使うなら「教育出版」ということで、皆さんのご意見を伺いたいことであります。

○山中委員長 では、池田官司委員、お願いします。

○池田（官）委員 私は、「啓林館」の教科書を選びたいと思います。

理科も三者三様の特征があると思います。「東京書籍」は、全体的な印象ですが、わかりやすいですし、図なども一つ一つ大きくて視覚的にも非常にわかりやすいような気がします。「教育出版」は、非常に記載も丁寧で、写真や図の数といいですか、情報量が非常に多いような気がします。

その中で、私が「啓林館」を選んだ理由ですが、理科というのは、生活の中

で疑問を感じて、それが実際にどうなのだろうということを追究していくところが大事だと思います。最初の疑問の部分が丁寧であること、例えば、各単元の最初に出ている大きな図に書かれている疑問なども、非常に生活に身近なところから出してみようというような形になっていると思います。例えば、6年生の物の燃え方などはそうだと思いますけれども、とにかく、これまで児童が経験した範囲の中でのことが取り上げられていて、そこからの疑問、生活からの疑問が取り上げられていることと、そこから予想、推測、仮説を立ててそれを検証していく過程は、「啓林館」が一番丁寧かと思いました。

そういう理由で、まず、疑問を出すところと、それを使つての仮説検証という手続が一番丁寧に書かれていると思い、「啓林館」を選ばせていただきました。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私は、「教育出版」を選びたいと思いました。

まず、問題解決能力については、調べた結果と自分の予測の差異点と共通点を考えるところと、それを話し合つて推論していく点が非常にいいなと思いました。あとは、教科書のつくり方が、「はてな?」「調べよう」「わかった」という3部構成になっていて、子どもたちにも非常にわかりやすいつくり方になっていると思いました。

また、雪に関する活動の取り扱いに関しては、先ほどもお話がありましたように、時計台の軒下のつららの写真とか、雪が降り積もった札幌のイチョウ並木の写真や雪の結晶などの写真も多く掲載されている点で、雪との関連性についても学びやすいと感じました。

実験等での安全性に関しては、全ての学年の裏表紙を使って、「安全の手引き」という記載があるのが非常に共感しやすいといえますか、わかりやすいという面においてもいいと思いましたので、「教育出版」がいいと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

それでは、町田委員、お願いします。

○町田委員 私も、「教育出版」を推したいと思います。

今、阿部委員がおっしゃられたように、「やってみよう」「はてな?」「予想しよう」「計画しよう」「調べよう」「けっかから考えよう」「わかった」というサイクルで理科の教科書が一貫してつくられています。課題探究的な学

習、問題解決を図っていくということを理科でも基本に据えていくことになる
と、そういう意味で非常にわかりやすい教科書ではないかと思います。

「鉄腕アトム」が出てきて、自分がどこを考えているか、どういうところで
勉強が進んでいくのかということが教科書からも図示できるという意味で、わ
かりやすい教科書ではないかと思いました。

○山中委員長 ありがとうございます。

臼井委員は皆さんの意見を聞いてさらに考えたいということでしたが、いろ
いろ出てきたご意見を踏まえて何かありますか。

○臼井委員 基本的には、皆さんがおっしゃるとおり、「教育出版」のおもしろ
いところは、とても詳しいところが多くて先生としてはおもしろいのですが、
少し苦手な先生からすると、「東京書籍」のほうが単純に実験がやりやすいと
ころがあります。

私は、基本的にどちらでもいいという立場だったわけですがけれども、より前
向きにもっと詳しく学ぶということを考えてみる、なぜそうかを突っ込んで考
えるのであれば、「教育出版」のほうが少しいかなと思います。

○池田（光）委員 ジャンルの取扱いとしてはどうなのでしょう。エネルギ
ー、電気、体といろいろなジャンルがありまして、重きを置いているものがある
のかどうかをお聞きしたいと思います。

○小林指導主事 内容の重さに関しては、指導要領上に内容が示されています
ので、そちらのバランスにおいて各者つくられていますので、違いはないか
と思います。

○臼井委員 その点に関して、個人的に全部の会社に改善していただきたい点
があります。電気のつくり方に関して、火力、風力、太陽とやっているのです
が、原子力発電がどこにも載っていないのです。一つ、「信濃教育会」だけが
少しあったのです。これをつくったときには原発はどこも動いていなかったで
すが、現実的に、いい、悪いは別にして、エネルギーとして既にあるものな
ので、これはどこも取り上げなかったことは、これからのことを考えてみたとき
に残念だったと思います。

ただ、扱い方はみんな同じだったということは確かだと思います。

○山中委員長 池田官司委員、さらにおっしゃりたいことはございますか。

○池田（官）委員 私は、導入のところの疑問のつかみ方は「啓林館」がよろしいのではないかと言いましたが、皆様のご意見を伺って、それも確かにそうだと思います。先ほどは申しませんでした、確かに、その後の考える筋道とか、「教育出版」の教科書は情報が豊富だと思いますので、「教育出版」になっても異存はありません。

○山中委員長 私も、基本的には「教育出版」がいいかと思っていますが、皆さんがおっしゃっていなかったことで一つ申し上げておこうと思うのは、我々の時代の理科には、人の誕生ということがありました。最近、時節柄、命のことをいろいろ考えるのですが、母親が赤ちゃんを産んで、そのときの喜びを語っている部分があります。あれは、ぜひ子どもたちに読んでほしいという気がしています。そういう意味で、私も「教育出版」を推薦したいという気がいたします。

そうしましたら、方向としては大体一致したということで、理科については「教育出版」を選定することによってよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 では、次に参りまして、生活です。

生活については、7月30日（水）の審議で、「東京書籍」「学校図書」「教育出版」の3者を選定の候補としています。この中から1者を選定することになります。

前回の審議、それから、それぞれご研究いただいた事柄を踏まえて、ご質問がありましたらお願いします。

○池田（光）委員 ここは、図書館について、3者の違いや特色をどう表現しているかをおさらいしたいと思いますので、もう一度、ご説明願いたいと思います。

○横道義務教育担当係長 図書館、読書にかかわることですね。

まず、読書については、生活科においては、読書そのものというよりも、読書活動に至るまでの道筋、意欲という部分を重視しています。特に、公共物とか公共施設、図書館やそこにある本の扱い、あるいは、本を借りるというあたりについての体験的な学習を重視しているということです。

まず、「学校図書」の図書館にかかわるところです。「学校図書」については、1ページで扱っており、子どもたちが図書館の司書の方に質問しているよ

うな場面が載っています。

続いて、「教育出版」になります。「教育出版」については、図書館に関しては4ページで扱っており、今、写真が映っておりますが、真ん中に、司書に質問する場面が載っています。また、その隣には、子どもたちが実際に自分たちで本を選んで読んでいる様子があります。続いて、56ページでは、実際に借りることに挑戦している場面が載っています。

続いて、「東京書籍」になりますが、下巻の58ページ、59ページです。こちらも、図書館については4ページ扱いで取り上げています。これも、図書館の司書の方に質問したり、ページをめくっていただくと、読み聞かせの場面であったり、実際に配架されている本の様子、あるいは、返却の窓口の様子も写っています。

「教育出版」それから「東京書籍」ともに、そのような実際に図書館での活動、あるいは、どのような手だてで本を借りるのかあたりについては説明されていますが、「東京書籍」において、一つ特徴的なことがあります。見づらいののですが、実は、これは札幌市のカードです。字も読みづらいののですが、中央図書館の住所が記載されていますので、この4ページで扱われている図書館は札幌市の中央図書館であることがここからわかりました。そうしますと、特徴としては、身近な札幌市の図書館が扱われているところから、実際にここに行ってみようという子どもたちの意欲を喚起することができる内容になっていると考えられます。

○池田（官）委員 自己肯定感というのは非常に大事だと思いますが、生活は全般に教科書で教えるより教科書を使ってもう少し発展的に各先生たちが教えてくださると思います。ただし、自己肯定感についての教材としての扱いに何か特徴はありますか。

○横道義務教育担当係長 今、おっしゃられたとおりで、活動を通して自分は何ができるようになったかを振り返ることによって、また、次への意識が生まれるということで、非常に重視しているというところです。

まず、自己肯定感、振り返りの部分ですが、それぞれ単元が終わった段階で、各教師が、例えば教科書の記入できる部分を用いながらやる場合と、教師が自分で工夫したようなカードを使う場合とそれぞれあるかと思います。

今回、学習に関しては、「学校図書」ですが、下の101ページをご覧ください。

「学校図書」においては、「みんなのすてき発見」ということで、自分だけではなく、友達のよいところを発見することによって互いに評価し合い、それから、次につなげていくというような取り組みで特色が見られるところです。

続いて、「教育出版」になります。下巻の113ページをご覧ください。

こちらは、「生活科ノート」ということで、それぞれの単元が終わった段階で自分で色をつけながら記入していけるような、塗り絵的な感覚もあるのですが、こういうものを採用して使っているところです。

少し前に戻りますが、「教育出版」の下巻の88ページをお開きください。

これは、先ほどの「学校図書」と違い、「自分のすてきを探そう」ということで、自分に向かっていくことになります。このようなカードをつくったり、張りつけて1枚のポスター的なものをつくったりという作業を通して振り返ることができる内容となっています。

続けて、「東京書籍」になります。下巻の98ページをお願いいたします。

「東京書籍」については、ほかの発行者と同じように、例えば手紙とか新聞という活動も載っているところがありますが、それに加え、ここの特徴的なもので、例えば、楽器の演奏とか踊りというような体を使った表現で自己肯定感、振り返りを行います。つまり、この1年間でこういうことができるようになったということを、体を使って、逆上がりもそうですが、ほかの者にはない活動の振り返りが可能な内容になっているのが特徴になると考えています。

○山中委員長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。特にご質問はありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長 それでは、また各委員のご意見を伺おうと思います。

今、いろいろご質問などもされた自己肯定感のことや、雪を中心とした冬の活動に焦点を当てながらご意見をいただければと思います。

これは、臼井委員からお願いします。

○臼井委員 私は、「教育出版」を推したいと思います。

その理由は、生活科は1年生、2年生という低学年でやります。そうすると、自分たちの身近な生活から自分の五感を使って自然を認識する、あるいは、社会的なところを認識します。その自然の認識ということで考えてみたときに、五感を使う中でいわゆる共感的な理解、つまり、自分を対象に置きかえて理解するということです。例えば、「種の気持ちになってお話をつくろう」とか「種になってみよう」とか、「モルモットはどんな夢を見ているのかな」というような生き物の気持ちになって見るということで、対象に自分を置きかえることの理解は、単なる動物や花の理解だけではなくて他者理解にもつながっていく

わけで、そういう点はとても大事だと思います。

また、トマトを栽培するところがあるのですが、例えば葉っぱから何々のにおいがするということですね。これは、ほかのところを見てもないです。要するに、単なる対象として栽培するというよりも、トマトを栽培するとわかりますが、葉っぱはすごく臭いです。そういう感覚的なところでトマトらしさを見えています。できたら、トマトやジャガイモ、ナスといったナス科の植物としての一般性もある程度アプローチしてほしかったなという個人的に言いたいことがあります。要するに、五感を使って共感的に理解をしようというアプローチをとっている点で、「教育出版」の教科書を推したいということです。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、池田官司委員、お願いします。

○池田（官）委員 私は、これは非常に迷うところでありまして、どれか一つに決めにくいところではあります。歯切れの悪い言い方になりますが、「学校図書」の先ほどの自己肯定感の特徴として、自分だけではなく、周りの方たち、周りの人たち、みんなのすてきを発見していこうというところはとてもいいと思います。また、「東京書籍」について、雪まつりの様子がかかなりはっきり出ていて、かつ、札幌市の市営交通を使ってそこに行くという写真が教科書にはっきり出ているのは大きいような気がします。

そういった割と細かいところであえて言えば「学校図書」か「東京書籍」で、一つに絞りにくいところなので、皆さんの意見をお聞きしたいと思います。

○山中委員長 それでは、皆さんの意見を聞きながら、後でご意見を伺います。次は、阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私は、「東京書籍」を推したいと思います。

まず、読書への親しみというところでは、先ほどご説明をいただきましたように、札幌市の中央図書館を掲載していただいているところが、子どもたちにとっては身近に感じられるのではないかと思います。

雪を中心にした冬の活動については、先ほどお話がありましたように、市営交通を使って雪まつり会場に行くという一連の流れだったり、実際にどうやってつくったのか、外国人とお話をする場面があったり、臨場感があるようなつくり方をされているところがありました。

また、それぞれの時期に合わせて、手を洗おうとか、うがいをしようという促進もあり、便利手帳ということでほかのページに誘導するような仕掛けもあ

って、子どもたちにとってわかりやすいのではないかという点から、「東京書籍」がいいのではないかと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

続いて、池田光司委員、お願いします。

○池田（光）委員 私は、「学校図書」を推したいと思います。

やはり、先ほどありましたように、最初のページに、「みんな大すき」や、上巻では「学校大好き」など、どんどん引き込んでいくようなストーリー性が始まっているなということと、1年生になったということで、前段の入学前のイメージもあって、非常に入りやすいのではないかと感じているのが一番大きな点です。それが全体に伝わっている感じがしますので、非常にいいなという感じがします。

ただ、先ほど議論がありましたように、身近な札幌市の写真があるので、それは本当に捨てがたいところだなと思いつつ、どんどん自分を広げていくような本だなという感じがしますので、「学校図書」を推したいと思います。

○山中委員長 では、町田委員、お願いします。

○町田委員 私は、「東京書籍」を推します。

阿部委員と同じ意見ですが、やはり、中央図書館や雪まつりのことが教科書に掲載されているのは、小学校の低学年でこの教科書を使うときに非常に親近感といえるでしょうか、その勉強に入っていくときに、よりいい効果があるのではないかと思います。

○山中委員長 それでは、池田官司委員に戻りまして、いかがでしょうか。

○池田（官）委員 池田光司委員のご意見を伺っていて、ほかの人を肯定するというようなことが下の最後のほうに出ていますけれども、「学校図書」は全体を通して自分あるいは周りの人たちを肯定していく、大好きということが全体のコンセプトとしてあるのかなと改めて感じました。

まだ迷っているのですが、やはり、「学校図書」の教科書が魅力あるかなと感じました。

○山中委員長 さて、三つの意見になりましたけれども、さらにそれぞれご意見をいただければと思います。

基本的に、身近な感覚、生活感覚ですね。身近という場合に、地域ということが中心になるのかもしれませんが、そういったあたりを踏まえながらどう考えていくかですね。

○池田（光）委員 池田（官）委員も一緒だと思いますが、「学校図書」の精神を「東京書籍」に組み入れながら授業をしていただければ、札幌を題材にしたテーマがいっぱいあるものについてもいいと思います。これは生活ですから、地域のものであるとそれが常に優先されるということにならないところもすごく葛藤があります。ただ、数学ではなく生活ですから、身近という意味では、地域のテーマを取り扱ったところにシフトしていくのもいいかなと話を聞いて思いました。

「学校図書」の精神はぜひ使っていただければありがたいと思います。

○池田（官）委員 そうですね。

町田委員からも指摘がありました。自分が使っている教科書に自分たちのまちがはっきり出ているのは、札幌に対する思いを育てていく上でも大きい要素だろうと思います。そう考えると、「学校図書」の自分や他者を肯定していくという感じを取り入れていただければ、「東京書籍」の教科書でもよろしいかと思います。

○山中委員長 臼井委員、いかがですか。

○臼井委員 正直に言って、そんなに大きな差はないのですけれども、特に見ているのは生き物のところです。冬のこともありますけれども、自分たちに身近な生き物がいるかどうかを見てみると、例えば、ダンゴムシを扱っているのです。ワラジムシはいますが、ダンゴムシは北海道にはなかなかいません。また、オオカマキリの話も出てきています。いろいろな指標となる昆虫ですね。それから、サツマイモの栽培については、私もつくったことがありますので、北海道でも違和感はないです。そういう指標的なもので見てみると、「教育出版」のほうが少しいいのかなと思います。

主張点は、それよりも共感的な理解というところですが、率直に申して大きな違いという話で言っているわけではありません。私は、多くの方が支持するところに動くことに何の問題も感じていません。

○山中委員長 動植物というのは、北海道は生物学的に本州と違うというところは多少考えなければならないかもしれません。

今の臼井委員、池田官司委員、池田光司委員のご意見などを踏まえて、生活については、身近な生活、そしてまた、自分の地域や生活感覚を重視して「東京書籍」という方向でいきたいと思います。

よろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○山中委員長 もちろん、その中で、ご指摘のあった自己肯定感、あるいは他者肯定というところも授業にはぜひ生かしていただくとともにお願いしながら、「東京書籍」を教科書として選定することにさせていただこうと思います。

では、続いて、音楽に参ります。

音楽については、7月30日(水)の審議において、対象となる「教育出版」「教育芸術社」の2者とも選定の候補としておりますので、この2者の中から1者を選定することになります。

これまでの審議、あるいは、それぞれ教科書を検討された中から、さらに質問したいことがありましたら、お願いしたいと思います。

いかがでしょうか。

○池田(官)委員 K i t a r aファースト・コンサートとの関連です。

「教育出版」のほうでホール姿の写真ではっきり出ています。K i t a r aではないにしても、音楽を演奏するホールの外観がはっきり出ている、イメージを持ちやすいということだったのですけれども、仮に、この写真が教科書になかったとしても、各学校の先生たちはK i t a r aの写真などを見せて補うということは可能なのでしょうか。コンサートホールの外観の写真は、どのくらい必須なのかといいますか、大きな要素なのかについてお伺いしたいのです。

○山田企画担当係長 「教育出版」5年生の「ようこそコンサートホールへ」というページですが、今回初めて載ったものかと思っています。これがもしなかった場合、当然、K i t a r aなどについてはいろいろなものに出ていますし、ホームページ等にも出ていますので、その中では説明できると思います。

どちらかというと、大事なのは、開いたページの中に、どんな楽器の構成があるのか、ステージではどういう配置がされているのかということです。こういったところの学習のほうで、より音楽の内容になるかと思っています。こういった点でいきますと、ここまでのスペースはないですが、「教育芸術社」のほ

うでも載っているページはあります。

○池田（光）委員 音楽の導入部分の楽譜についていろいろ工夫されていると思いますが、その違いをおさらいしたいと思います。

○山田企画担当係長 楽譜、音符、休符という意味でよろしいでしょうか。

○池田（光）委員 そうですね。音楽の基礎です。

○山田企画担当係長 「教育芸術社」の2年生の27ページをご覧ください。

こちらでは、「かいてみよう」ということで、その上には「この空とぼう」という曲があって、その曲中には四分音符と四部休符が新たに出てきます。2年生では早いのではないかという意見はあるかもしれませんが、あえてこういう音符、休符に対する子どもたちの興味・関心を高めるねらいで、こういったコーナーを設けております。同じようなところが2年生で3カ所ほどあります。

一方、「教育出版」は、3年生の9ページになります。

前回、小委員長からもお話をさせていただいたのですが、こちらには、「楽譜のお話」というタイトルで1ページを割いています。透明シートをめくったり、置いたりしながら音符や休符の名前を実際に書いてみたり、働きや意味を覚えたりということができるような仕組みになっているところです。

この後の学年からは、こういったことを基準にしながら少しずつ音符、休符、記号などの働きの意味を徐々に増やしていくことになっています。

○池田（光）委員 日本の古来の歌も含めて、日本の歌の充実度、バリエーションの違いを教えてください。

○山田企画担当係長 前回の引き続きになりますが、「教育出版」の3年生、40ページを改めてご覧ください。

3年生の「ふじ山」という曲ですが、これは歌唱共通教材といいまして、全国どこの学校の子どもたちも学習する曲です。「教育出版」の場合は、この共通教材の扱いが非常に丁寧という特徴があります。かなり大きな写真に縦書きの歌詞を置いて、富士の状況がよく見えるようなページがあります。

その裏をめくる、もう少し富士山の説明が書かれています。最後に楽譜が出てくる仕組みになっています。このように、実際に札幌の子どもたちは、ふだん富士山を見ることができないので、そういった歌の情景を写真などでしっかりイメージできる部分が多く置かれています。そういった面で、想像力を働か

せて歌うことができるかなと思います。

また、「こころのうたみんなのうた」というコーナーが後ろに載っています。両者とも日本の歌、みんなの歌、童謡とか唱歌を大事にしているのですが、「教育出版」ではこのように巻末をうまく利用しています。

「教育芸術社」では、どちらかという、歌唱共通教材というよりは日本の音楽だけで一つ題材を必ず各学年でこしらえていて、その中で歌を歌ったり、鑑賞したりということをあわせて学習するようなユニットを組んでおります。

○池田（光）委員 それは何学年ですか。

○山田企画担当係長 「教育芸術社」の1年生です。52ページになります。

○池田（光）委員 やはり、富士山がああいうふうに迫力があると歌い方も違ってくるのでしょうか。情景が浮かぶので、よさそうな気がします。

○町田委員 今の伝統音楽の取り扱いは、「教育芸術社」は「日本のうたを楽しもう」というのは各学年であるのですか。

○山田企画担当係長 少しずつ題材の名前が変化してきます。先ほど1年生では「日本のうたを楽しもう」でしたが、3年生になると「日本の音楽に親しもう」ということで、目次を見ていただけると一番わかりやすいかと思います。どの学年にも日本の何々を何々というような題材がつくられています。

○山中委員長 最後の6年生になると、「日本と世界の音楽を楽しむ」ですね。ほかにいかがでしょうか。
質問はよろしいですか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 それでは、これまでいろいろ検討されたことを踏まえて、各委員のご意見を伺いたと思います。

今度は、池田（官）委員からです。お願いします。

○池田（官）委員 私は、「教育芸術社」の教科書がよろしいと思いました。

理由は、先ほど池田（光）委員からも質問が出ていましたが、いわゆる楽典的な取り扱いについて、比較的早い学年から、それも実際に自分で手を動かし

て書いてみようという活動があることに象徴されるように、私の理解では全体的に「教育芸術社」の教科書のほうが実践的といいますか、実際の音楽を行って楽しんでいこうということが強調されているような印象を持ったからです。

○山中委員長 ありがとうございます。

阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私は、両者どちらもそんなに大きな差は感じなかったのですが、最終的な決め手になったのは、K i t a r aのホールのイメージをすごく臨場感あふれる形でつくっていただいているところにおいては、「教育出版」がいいのではないかと考えています。

○山中委員長 池田光司委員、いかがですか。

○池田（光）委員 私も、池田（官）委員と同じように、導入部分が非常に入りやすそうだなということが1点です。それから、伝統音楽というか、日本の音楽が充実していて、そのことはこれからまだまだ、ますます大事になってくるのではないかというふうなことで、「教育芸術社」を推したいと思っています。

○山中委員長 ありがとうございます。

では、臼井委員、お願いします。

○臼井委員 私は、「教育芸術社」を推したいと思います。

理由は、日本の歌い継ごうという形で、日本の歌が多いことです。個人的経験ですが、先日、学生に、「雀の学校」と「めだかの学校」という曲を聞かせたのです。両方とも聞いたことがないという人が多く、「雀の学校」においては誰もいませんでした。「むちを振り振り チイパッパ」だなんて体罰の歌とまで言われ、これは少し危機感を感じました。

やはり、伝統的な日本の曲をしっかり歌い継ぐことが必要ではないかということで、こちらが多い「教育芸術社」を推したいという単純な理由です。

ただ、楽典的なことや内容的なことでは、正直に言って、両方とも遜色ないものと思っています。

○山中委員長 町田委員、お願いします。

○町田委員 私も、今、臼井委員と同じ日本の歌を楽しもうというコーナーを設けるとするのは非常に大きな考え方ではないかと思います。そういう意味で、私も「教育芸術社」の教科書を推したいと思います。

○山中委員長 阿部委員から何かありますか。

○阿部委員 私は、正直に言うと、K i t a r a のホールだけだったので、皆さんのご意見でいいと思います。

○山中委員長 それでは、日本の音楽を楽しむといえますか、日本の音楽が多いことを大きな理由としながら、そのほかにも、池田（官）委員からご指摘がありました実践的であるなどいろいろありました。採択参考資料、札幌市としての研究項目も考えた上で、それに加えて、今申したようなところを理由として、音楽については、「教育芸術社」が札幌の子どもたちにとってより望ましいのではないかとということで選定したいと思います。

それでは、次に参ります。

「図画工作」については、7月31日（木）の審議において、対象となる「開隆堂出版」「日本文教出版」の2者をいずれも選定の候補としたので、この中から1者を選定したいと思います。

これまでの審議を踏まえ、また、各教科書を実際に検討された中で、さらにこの段階で質問したいことがありましたら、よろしくお願いします。

○池田（光）委員 美術館、あるいは、まちの彫刻とか美術に触れさせるような工夫がされているのは、両方にあったような気がするのですが、何か特徴があったら教えていただければと思います。

○大井指導主事 まず、「開隆堂出版」は、3・4年の下巻の裏表紙になります。地域にある造形作品を生かした鑑賞活動が紹介されています。

また、同じく「開隆堂」の5・6年の上巻の裏表紙です。日本の伝統的な工芸品等の写真ですが、身近にある日用品等の中に、形や色、技法の美しさ等をみずから進んで味わうことが可能な内容となっているのが「開隆堂」の特徴です。

次に、「日本文教出版」です。

5・6年の上巻の30ページ、31ページをご覧ください。「美術館とつながる」ということで、全国各地の美術館での体験を含んだ鑑賞活動とかワークショップの様子が紹介されています。

また、3・4年生の下巻は、先日のお伝えしたところではありますが、「からだでかんしょう」ということで、美術作品を味わい際に実際にそのポーズを模倣するなど、見るだけではなくて、体全体の感覚から感じ取って、感性を働かせて鑑賞するという活動が紹介されています。

こういった体験的な身近に触れたり、ポーズをとるところが札幌の5年生で行っている「ハロー！ミュージアム」でもよく見られる光景でして、関連づけて学習することが可能な構成となっているのが「日本文教出版」の特徴です。

○池田（光）委員 もう一つは、延長としてお話ししていたのは、両方とも、身近な材料を使って美術品をつくっていくという工夫がされていると思うのです。その辺の工夫度合いはいかがでしょうか。身近なものを使ったテーマが非常に多いと思いますし、いいことだと思います。例えば、ペットボトルでもいいでしょうし、紙袋でもいいのです。

○大井指導主事 その点については、両者とも同じような活動が紹介されています。

○池田（官）委員 「開隆堂」のほうが、実際の作例といいますか、児童の皆さんの作品が豊富だったと思いますが、これは、実際の指導の場面では作例は多いほうが児童の皆さんのイメージが膨らませたりすることができるものなのではないでしょうか。「日本文教出版」は、どちらかというと、作品というよりも、活動している様子の写真が多いと思ったのですが、作品と活動の様子ということで、児童の皆様への影響といいますか、指導のしやすさで違い、特徴はあるでしょうか。

○大井指導主事 作例が多いということは、それだけ一人一人のイメージ、例を参考に発想、構想を膨らませる、イメージを持ちやすくなっているという点で、「開隆堂」のほうが特徴があるかと思います。

また、「開隆堂」は、つくる際に、作例とともに、例えば、3・4年下の版画、36ページ、37ページですが、下のほうに、作例とともに、つくる手順が示されているところが特徴となっています。こういった例を参考にしながら、自分のイメージをあらわしているところに、「開隆堂」の特徴があると思います。

「日本文教出版」は、この前にお見せした糸のこを使った工作です。こちらは、作例ももちろんですが、つくっている授業での子どもの活動の様子がよく見える写真が多く掲載されているところが特徴です。

実際につくる際に、表現と鑑賞が一体に働いて、双方、相乗効果でイメージ

アップ、構想が膨らんでいくところが図画工作では大事にされていますので、お互いにつくっている様子を見合いながら、また、お互いにこういうところがいいねとよさを感じながら、また自分のつくる活動に活かしていくといった一体的な活動の様子がよく伝わるところが「日本文教出版」の特色となっています。

○山中委員長 ほかにご意見はありますか。

安全への配慮の点では、大きな違いがありますか。

○大井指導主事 両者とも、まず、巻末にまとめて掲載されています。

例えば、「開隆堂」は、1・2年の上の巻末に、「どうぐばこ」というページがあります。これは、各学年とも「どうぐばこ」という名前で、2ページを割いて、はさみの使い方や道具の使い方をあらわしています。前のページでは、クレヨンやパスの使い方といった道具の使い方を、安全も含めて計4ページで紹介しています。

「日本文教出版」は、1・2年の上巻の巻末をご覧ください。

こちらは、6ページを割き、はさみの使い方とか切り方、この際に注意する点が掲載されています。また、「気をつけよう」というコーナーが随所にあります。はさみを人に渡すときは刃のほうを持って渡そうといったコーナーが、巻末だけではなく、各題材の途中途中にも大きく掲載されているのが「日本文教出版」の特色です。

また、「開隆堂」も、「安全」というものがところどころに掲載されています。

○池田（光）委員 これは、同じテーマで個々のもの、例えばお面など同じようなものをつくることが多いのですが、子どもたちが共同で一つ何かをつくるということで工夫されているような場面はどんなところがありますか。

○大井指導主事 各者とも、同じような題材を扱っているところは結構多いです。活動の様子という点で、複数の子がかかわって共同している様子は「日本文教出版」のほうに多く掲載されています。

○池田（光）委員 例えば、どのようなところでしょうか。

○大井指導主事 例えば、造形遊びのところで、「日本文教出版」の1・2年の上の12ページ、13ページです。

こういった造形遊びの部分で、見開き 2 ページで紹介しています。たくさんの子どもがかかわっていろいろな土を使った造形をしている様子が、いろいろな造形物、種類も豊富に掲載しているところがあります。

○池田（光）委員 片づけの仕方がうまく表現されているのはどちらですか。つくる、道具を片づけるとか、その辺の工夫をされているというのはどちらでしょうか。

○大井指導主事 双方とも、片づけるところにも着目したコーナー等の記載があります。

○池田（光）委員 ほとんど文章だけで、図ではないのですね。言葉だけですね。

○大井指導主事 言葉で表現しています。

○山中委員長 大体よろしいでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 それでは、今までの議論、あるいは、ご自分の研究結果なども踏まえながら、札幌の子どもたちにとってより望ましい教科書はどれかというご意見を伺いたいと思います。

阿部委員からお願いします。

○阿部委員 どちらも大変いいと思っているのですが、どちらかというと、「日本文教出版」がいいと思っています。

作品は、どちらもイラストや写真を多く使われていてわかりやすく掲載されていると思うのですが、「日本文教出版」は子どもたちが実際に学んでいる様子や作品をつくっている様子が非常に表情豊かに掲載されているシーンが多く使われている意味から、子どもたちが親しみを持って図画工作に臨めるのではないかと思います。また、巻末に道具の使い方などがまとまって掲載されていてわかりやすいという点から、「日本文教出版」のほうがいいかなと感じています。

○池田（光）委員 私は、遜色が余りないと思いますが、「開隆堂」の表

紙が大変気に入っています。まさに図画、図工はこうだなとわくわくしたり、みんな参加してやろうなど、次はできたらいいなという思いを込めて、夢を広げてとか、心をつないでというのは、まさに図画工作の原点ではないかと思っています。これが表紙にあって、これを見ながら勉強していくということは、子どもの成長にとってすごくふさわしいのではないかということで、「開隆堂」を推したいと思います。

○臼井委員 私は困っています。両方とも遜色がないところがあります。

前回、「日本文教出版」にかわったときに、子どもの作品例が多かったという理由で選定されたと思うのです。そのときに、作品例が多かったのだけでも、一つ一つの絵がやや小さい感じがしていたのですが、今回、「日本文教出版」は大幅にページ数を増して、作品の数よりも製作している楽しそうな子どもの様子というか、その辺の動きが見えてきているところで、正直に言って、前の欠点だろうというところが随分改善されていたのです。

「開隆堂」は、前のところがそのまま継承されていて、それぞれがいい作品がなかなか多いなと思います。「開隆堂」を推す点は、1年生のスノーガーデンショーということで雪のところがあります。これが3・4年生になっても、雪や氷でということで、雪の上に色の影が映ったというところがあるのです。やはり、どうしても冬になると、子どもの活動が閉じこもりきりになるところが外でやるということと、アートの一つの形を出しているという点では、札幌らしさというところもあって、両方の内容で大きな違いは見出せません。そうすると、札幌らしさという点で、「開隆堂」がほんの少し上かなという程度であります。

○池田（官）委員 私も「開隆堂」を選びたいと思っています。

確かに、差は大きくないと私もすごく思います。その中にあって、作例が比較的豊富で、一つ一つの作例、あるいは、載っている作品が、必ずしも児童がつくったものだけではなくて、そのほかのものも含めて、一つ一つのインパクトが大きいのが「開隆堂」かと思いました。

やはり、「日本文教出版」は、何といたっても児童たちの顔が生き生きしています。札幌市のことを考えると、表現と鑑賞ということがあり、先ほど説明がありましたように、表現ということについても、豊富な作例、インパクトの高い作例を見て、そこで想像力を膨らませていくということが大事ではないかと考えまして、「開隆堂」を推したいと思いますが、大きな差はないと思います。

○町田委員 私は、「日本文教出版」を推したいと思います。

理由は3つです。

一つ目は、まず、各委員がおっしゃるように、子どもの表情が非常に生き生きとしていて、楽しそうにつくっているというところです。私も以前、広報さっぽろをつくっていたことがありまして、子どもの表情を載せるのであれば、生き生きと楽しい子どもの表情がある教科書のほうが、これを使って学ぶ子どもも楽しいものになるのではないかとということが1点です。

二つ目は、美術館の鑑賞の活動を実際の活動の写真で紹介しています。これは、札幌市でも「ハロー！ミュージアム」につながるということで、「日本文教出版」のほうがいいのではないかとということです。

三つ目は、平成23年に一回採択替えをしていますので、毎年毎年かえるというより、一つの教科書で落ちついてやったほうがいいのではないかと考えています。そういうふうに言うと、かえられないということにもなってしまいますのですが、4年ごとにかえていくのも少しせわしないという感じがするところです。

以上の3点です。

○山中委員長 この問題も分かれました。

皆さん、それぞれ他の方の意見も聞いた上で、さらにおっしゃりたいことがあればお願いしたいと思います。

基本的には遜色ないという感じが強いのだろーと思いましたが、どの部分を強調するというか、重点として捉えるかというあたりに違いがあるかと思っています。

継続という問題については、必ず同じ教科書を使っているということではなく、同じ会社の教科書だから似たような傾向、似たような作品が出てくるといふことかと思いますが、現場の立場としてはどうですか。

○大井指導主事 どちらになっても、教材をしっかり研究しながら指導していくということと、手引を作成して、それにのっとって指導していくことができます。

○池田（光）委員 私も、もう一回かえるのはどうかなというところが気になっていた案件ですが、差し支えないのであれば、かえても構わないかなという気はします。

ただ、気になるのは、実際に子どもたちが慣れた中でかわるという例は余りないと思います。それがいいのかどうかは心に残るなど、今、気にはなっています。

○山中委員長 子どもたちにとっての影響はどのようなのでしょうか。

今、3年生で、4年生になって教科書の発行会社が変わると、あと4年間、その会社の教科書を使うということで、お兄ちゃんとかお姉ちゃんがいるとか、兄弟の関係で違う教科書になるというところで、それなりに影響があるのかもしれないと思うのですが。

○学事係員 もしかかわるとなると、その場合であれば、1・2年、3・4年、5・6年となるので、継続利用になっていますので、1年、3年、5年の教科書がかわります。2年、4年、6年は旧版利用になります。

○池田（光）委員 その次はどうなるのですか。

○学事係員 そこに関しては、その1年、3年、5年と2年、4年、6年が違う教科書を使いますが、その翌年は全員が新しい教科書を使うことになります。

○山中委員長 学年進行による不都合が起きることはないですか。

○学事係員 採択替えのときは、旧版利用は必ず発生します。

○山中委員長 4年前にも起きているわけですね。ただ、4年前に採択替えして、今度また採択替えするということをどう考えるかでしょうね。
中身としてはそんなに変わらない気がします。

○池田（光）委員 次の教科書の改定のときにはどうなるのですか。同じ議論ですか。

○山中委員長 当然、また同じような議論になりますね。教科書の内容を見て決めるわけですからね。

○阿部委員 池田（光）委員がおっしゃった「開隆堂」の表紙のわくわく感は、私もすごく感じています。開いてどんなページになるのかという楽しみを感じるというのは、私もそうだと思います。

「日本文教出版」の最終ページの44ページから、ドリームプランというものがあって、図画工作を通してまちをつくるとか、夢がここにすごく育まれているなというのと、次のページでは、「12年後のわたし」ということで、図画工作を通して自分の将来の子どもたちが夢を感じるというところと、次のページには、中学に向かっての私という想像を育むページがあり、「開隆堂」にはそ

れに該当するものが発見できませんでした。そのあたりが大きなポイントになるかなという感じがしたのですけれども、いかがでしょうか。

○大井指導主事 「開隆堂」は5・6年の下巻の38ページ、39ページに「12さいの力で」ということで、ここまで成長してきた過程をつくり、それを生かして物をつくっていこうというページがあります。

その次のページになりますが、「伝え方をたのしもう」ということで、みんなで卒業前に将来の夢や希望などを共同でつくってあらわしていこうという活動が紹介されています。

○山中委員長 その説明を踏まえて、さらに何かありますか。

○阿部委員 似ているようで、また違うなという印象を受けたので、そういう意味では、最初はそんなに差異はないと思いましたけれども、将来の夢だったり、夢を持つとか、想像するという図画工作の意味においては、「日本文教出版」もいいかなというふうに改めて感じました。

○池田（光）委員 私は、本当に差異がないような気がするのです。私は「開隆堂」にしましたが、町田委員が言っている1回というのは、前回決めたこともあって、それはどうかなというのが気になっております。その辺も皆さんから意見を聞いていただきたいと思います。

○山中委員長 継続性との関係について、皆さんはどう思いますか。

特に「開隆堂」を推薦された方がどう思うかというところも聞きたいと思います。

○池田（官）委員 私は、「開隆堂」の教科書を改めて見ていて、普遍性があるのかどうかかわからないですが、私の好みだなという気がします。

例えば、1・2年生の下20ページで、粘土をいじろうというのですが、グアナコという言葉から始まったのです。グアナコはどんな生き物だろうと考えて、自分のグアナコをつくってみようと。ただ単に絵を描くとか何か造形するということからもう一歩進んで、1枚めくって23ページの上を見ていると、どんなお話が生まれるかなと。ただ造形や絵を描くということからもう一歩進むようなものが「開隆堂」の教科書にあるような気がします。これは、全体的にそういう気がするのです。

そういう特徴はあると思うのですが、先ほど言った1期4年でかえるという

のは落ちつきがないのではないかということに凌駕するほどの特徴なのかというと、よくわからないところです。やはり、継続して「日本文教出版」の教科書を使ってみたほうがいいのではないかということに関しては、それを押してまで「開隆堂」というほどではないかと思います。

改めて見ますと、捨てがたいなと思うところでもあります。

ストーリー性が随所に散りばめられていて、想像力といいますか、見たもの、つくったものからストーリーを広げてみようとか、これについてどんな思いをするかというところが豊富なのかなと改めて思いました。

では、どちらなのかということをはっきり言えなくて申しわけありません。

だからといって、続けて使ったほうがよろしいのではないかということも確かにそうだと思います。

○臼井委員 先ほど申したように、「日本文教出版」の教科書は、今度、ページ数が増すだけではなく、子ども同士のかかわりや、楽しそうな様子が入ってきたという点で、前回の4年前よりも随分よくなった気がしています。その意味では遜色ないというところで、札幌の特徴の雪というところで見ると、「開隆堂」がいいかなという気がしました。

ただ、そのときにも申しませんでしたでしたが、気になったのは、前回、「日本文教出版」にかえて、また次にかえるということは、4年後はどうなるのかという話になりますけれども、期間として4年というのはどうかという疑問を持っていたことも事実であります。

そういうことで、正直なところ、両方に大きな差を認めるものではありません。

○池田（光）委員 私も、これは捨てがたいのですけれども、前回やったことをよみがえらせてみても、もう1期やってみるということは大事ではないかと感じます。

○山中委員長 本来的には、教科書としてどちらが札幌の子どもにとって望ましいかという内容の問題が中心でしょうが、もう1期、同じ会社の教科書を使ってみるのが札幌の子どもたちにとって望ましいという場合もあるとは思いますが。

これは、結論がなかなか出ないところではありますが、4年後にどうなるか、もちろんそのときに私どもは教育委員会に関与していない可能性が高いかもしれません。そういったところもあり、何とも言いがたいのですが、もう1期、同じ会社の教科書を使ってみようかという雰囲気かなと感じています。

4年後は何とも言えませんが、「日本文教出版」の教科書を選定するという
ことでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 歯切れの悪い結論になりますけれども、そういうことにさせて
いただきます。

家庭の審議に入ります。家庭については、7月30日（水）の審議で、「東京
書籍」と「開隆堂」出版の2者をどちらも選定の候補とするということにして
います。この中から1者を選定するということになります。

それでは、この段階で、皆さんから質問などがありましたらお願いします。
いかがでしょうか。

○池田（官）委員 細かいことになってしまうかもしれませんが、「開隆堂」
と「東京書籍」を比較させてもらって、こういう印象を持ちましたが、大きく
外れていないかということを確認していきたいと思います。

写真が豊富で全体の流れが見やすいのは「開隆堂」だと思うのですが、「東
京書籍」のほうが少し細かい知識が出ているような気がします。

例えば、「開隆堂」の9ページ、「東京書籍」の11ページのお茶の入れ方
のところですね。「東京書籍」は、お茶のおぼんの上の乗せ方まで出ているので
すね。お茶を出すときに、茶たくの上に最初から乗せるのではなく、茶わんと茶
たくを別にしておいて出すときに乗せるというような豆知識的なことですね。
よく見ると「開隆堂」も同じような写真が出てはいるのですが、わかりやすい
のは「開隆堂」で、少し踏み込んだ豆知識といいますか、情報量が多いのは「東
京書籍」かなという印象を持ちました。そういう特徴は、全体を通してあるの
でしょうか。それとも、この部分だけのことでしょうか。

○岩渕指導主事 写真はどちらが多いか少ないかというあたりは、なかなか難
しい判断なのかなと思いますが、写真の使われ方においては、両者それぞれに特
徴があると思います。

例えば、「東京書籍」においては、前回の会議の中で話題に上がりましたが、
写真の使い方として、44ページ、45ページをご覧いただければと思います。

写真を大きく使い、比較しながら、汚い部屋、きれいな部屋という形で、子
どもたちにこの写真を見せて、授業の導入として考えさせる、このような写真
の用い方をしています。

続いて、「開隆堂」においては、同じ内容ということで、25ページをご覧

ださい。

今のような汚い部屋という形で初めの写真は使われていませんが、ここに小さな写真として、汚れている部屋という形で載せて、ページをめくり、「開隆堂」の26ページ、27ページをご覧ください。

実際に子どもたちがどのようにきれいにしていくかというあたりで、先ほど委員からもご指摘がありましたように、細かいこのような具体的な写真を載せ、それらを行うと最終的にこういうふうになりますという形の写真の使い方をして特徴を出していると思っています。

○池田（光）委員 「開隆堂」にはリユースとリデュースの関係が書かれていたと思うのですが、その中で、古いものを使った創意の工夫が何カ所か見るのですが、身近にあるものを活用しながら工夫していこう、掃除をしたり、何かに転用したりするという内容のものはどちらが充実していますか。

○岩渕指導主事 どちらが充実しているかというと、それぞれリユースや古いものを活用するという部分の内容については触れられていると思います。ただ、具体性という部分においては、今出たリユースにおいては、例えば、「東京書籍」の50ページ、51ページに、いろいろなものを活用したリユース、リサイクルというあたりがあります。

さらに、子どもたちに少し考えさせるように、ワークシート的なものが上段に出ています。このような形で子どもたちに考えさせていくというのが特徴的です。

「開隆堂」の28ページ、29ページをご覧ください。

「開隆堂」においては、リユース、リサイクルのあたりは、子どもたちが実践しやすいように、身近な例を挙げながら具体的に、なおかつ、生活の知恵という部分も踏まえ、子どもたちの実践ということで身近な題材を取り上げながら、図を用いながら説明していくということが大きな特徴かと考えています。

○池田（光）委員 家族の団らんのところも、どの程度の表現の違いがあるのか、教えていただきたいと思います。

○岩渕指導主事 学習指導要領において、家族や家庭についての学習という部分で、家族の団らんという題材名として用いられています。

これは、「開隆堂」において大きな特徴があるかと思います。何かというと、先ほど申しました家族や家庭についての学習という内容を小分けに配列しています。これは、小委員会でも話が出ていたのですが、例えば、「開隆堂」の62

ページに、「家族とほっとタイム」という内容を起こして、ここで指導することになっています。

「東京書籍」においては、6 ページですが、題材が家族の団らんという言葉にはなっていませんが、家族の大切さとか温かさを実感させる内容となっています。

まとめますと、「東京書籍」においては、前半の部分で少し厚く家族の団らんについて触れる内容となっており、「開隆堂」においては、少し小分けにして、早目に家族の団らんがあり、時間を少し置いて「家族とほっとタイム」ということで、時間を置いてさらに学習するという流れに特徴があると思っています。

○山中委員長 ほかにありますか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長 それでは、質問はこの程度で打ち切りまして、これまでの審議、あるいは皆さんが検討されたことを踏まえて、どの会社の教科書が望ましいかということのご意見をいただきたいと思います。

池田光司委員から始めたいと思います。

○池田（光）委員 私は、昨今の時代を見て、家族との絆がとても大事ななということと、再利用するということは、具体的に書いて表現しているという二つの点で「開隆堂」を推したいと思っています。

○臼井委員 教科書を挙げる前に、両方の教科書に対して改善をしていただきたいと思います。

一つは、調理を中心に見たのですが、両方ともゆで卵が載っているのです。札幌市の給食では、アレルギーの問題がありますので、卵料理は出しません。そういうことが本当によいのか。そうすると、配慮の問題等も考えなければいけないという話です。

また、調理のところでは、例えば、ハウレンソウのお浸しとみそ汁があるのですが、小学生の食生活の中でこれが現実的なものかどうかです。ここで大事なことは、むしろサバイバルスキルであって、ファーストフード店などに行くときにファーストフードのどこがどうなのか、例えば、インスタントラーメンを食べなければならないというときには、インスタントラーメンにこういう工夫をすると栄養の問題が少なくなるなど、より現実的なサバイバルスキルとし

て扱うべきところがきれいごとになってしまっているのは、とても残念です。

その上で、二つの教科書を比べてみたときに、私は「開隆堂」を推します。その理由ですが、「開隆堂」にはチャレンジコーナーというところがあります。それぞれ裁縫のものとか調理のものとか、工夫するところの余地があったり、料理の手順が大きくて見やすいという理由があります。

もちろん、「東京書籍」には自由研究というチャレンジコーナーに対応するところがあるのですが、基本的には、調理のところが大きく見やすいところを含めて、大きな違いはありませんが、「開隆堂」を推します。

○山中委員長 池田官司委員、お願いします。

○池田（官）委員 私も「開隆堂」を選びたいと思います。

理由は、実践的、体験的な学習活動についての取り扱いという観点から、家庭は実習が非常に重視されるだろうと思います。実際にできるようになれるかどうかということが重要ではないかと思います。その観点からいくと、技術的なことについて写真が非常に豊富でわかりやすいということが一番の理由です。

○山中委員長 ありがとうございます。

阿部委員、お願いします。

○阿部委員 私も、皆さんと同じように、「開隆堂」がよいと思います。

理由としては、家庭なので、作業のプロセスが見開きになっていて、横に見やすいということと、全てにおいて統一感があるので、初めて料理をつくったり、初めてミシンを使うような子どもたちにとっては、非常にわかりやすく手順が書かれていて、なおかつ、非常にわかりやすい表現がされていて、イラストや写真も多く使われているという点です。

○町田委員 私も「開隆堂」を推したいと思います。

理由は、各委員と同じで、第一に見やすいという点と、家庭科ですから、家庭のこと、家族のことがしっかり取り上げられています。今のこういう時代だからこそ、そういう取り上げがきちんとあることが必要なのではないかと思います。

○山中委員長 珍しく全員一致です。

実践的、体験的な学習活動をわかりやすくきちんと取り上げており、家庭というものを大事にしているという理由が主かと思います。

では、家庭については、「開隆堂」の教科書を選定するということによろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 本当に長時間申し訳ございませんが、少し休憩しましょう。

〔 休 憩 〕

○山中委員長 それでは、会議を再開いたします。

では、体育の審議に入ります。

体育については、7月30日（水）の審議において、「東京書籍」と「学研教育みらい」の2者を選定の候補としていますので、この2者から1者を選定することにいたします。

前回の審議を踏まえて、また、それぞれに教科書の研究、検討をされました結果を踏まえて、この段階でさらに質問したいことがありましたらお願いいたします。

○池田（官）委員 性に関する指導について前回も伺ったのですが、多様性ということについて、個人差が非常に大きいところだと思うのですが、個人差が大きいということについて触れている度合いはいかがでしょうか。二つの出版社で何か差や特徴はありますか。

○村岡研修担当係長 まず、「東京書籍」ですが、第4学年、「育ちゆく体とわたし」というところにおいて、16ページ、17ページの3・4年生の教科書をご覧ください。

ここでは、乳児の手形や靴の原寸大の写真があります。このように自分の手足を重ねて比べてという女の子の発言もあるように、自分の成長を実感するようなどころがあります。

また、隣のページには、自分の成長を記録するところがありまして、この帯を友達とまた比べることによって、自分は1・2年ではこのように伸びているけれども、2・3年は少なく、また3・4年は伸びてきたという違いがはっきり感じられるものとなっています。

続いて、「学研教育みらい」になりますが、教科書の19ページ、18ページをご覧ください。

このように、いろいろな伸びの違いについて、4人の子どもが大人になるま

での成長を示し、棒グラフ、折れ線グラフなど、頭の上に違いをはっきりと載せまして、自分に近いもの、そうではないもの、また、人によって違うのだというところが示されています。

右のページにも、そのような個人差があるということがはっきりと示されています。コウイチさんとユウタさんで伸びが全然違って、一人一人違うのだということがこのように知識としてきちんと押さえられるようになっています。

また、次のページですが、「東京書籍」にもありましたが、「学研教育みらい」にもありまして、自分の伸びが実感できるようになっています。

その個人差が安心して受け入れられるように工夫されています。

○池田（官）委員 私がもう少しお伺いしたかったのは、性に関する指導ということで、例えば、日本で言いますと初経とか精通ということに関する個人差や多様性とか、そのころに異性関係として起こってくるような違い、多様性、そういうことについてはどうでしょうか。

○村岡研修担当係長 「東京書籍」の22ページ、23ページをご覧ください。

左のページには、体の中の変化について示されています。12歳で初経が起こる子もいれば、そうではない子もいます。8歳、9歳までに起こる子もいます。いろいろ幅があるということを示されています。

また、隣のページには、今度は心の変化についても示されておりまして、個人差があるということ、知識として、また考えるように工夫がされているところです。

「学研教育みらい」もお話しさせていただいてよろしいでしょうか。

23ページ、22ページになります。

大人の体つきということで、子どもと比べて思春期になるとこのように変わるということが示されています。右のページには横向きの体が表示されており、男子に起こる変化、女子に起こる変化、また、その下になりますが、大人の体験談など、いつごろから起きたのかということを含めてお話が載っています。

その下ですが、自分の体の変化に気づいたときということで、自分にどんな言葉をかけてあげたいかということで記入するところも設定されています。

以上が特徴となります。

○池田（光）委員 学校における保健師の役割は大きいと私も思うのですが、保健師の役割や、困ったときに訪ねていけるとか、そういう工夫がなされているような表現はあるものでしょうか。

○村岡研修担当係長 保健室の養護教諭の先生ということ説明させていただいてよろしいでしょうか。

「学研教育みらい」の25ページの上になります。3・4年生の教科書になります。

中1のアキコさんのところで、自分に不安があるときに保健室の先生に相談したらということ載っているのが特徴です。

○山中委員長 いじめなどいろいろな悩みや、今言われたような問題以外にも生きる悩みなど、そういうことで保健室に行って相談するような話もあるので、そういったところは出てこないのですか。

○村岡研修担当係長 不安や悩みというところでは載せられています。

○山中委員長 スーパーバイザーなど、相談関係の方が学校に入ったりしていますね。そういうものについて触れているところはないのですか。

○村岡研修担当係長 「学研教育みらい」の教科書になりますが、スクールカウンセラーのお話が載っているところがあります。

5・6年生の教科書になりますが、12ページ、13ページです。

12ページの一番上のところに、スクールカウンセラーが教えてくれましたということ載せてあります。

また、15ページの真ん中辺には、男性の絵があり、スクールカウンセラーの話ということで、私たちスクールカウンセラーにも気軽に相談してくださいという話が載せられています。

○山中委員長 「東京書籍」はどうですか。

○村岡研修担当係長 「東京書籍」は、スクールカウンセラーのところはないと思われます。

○阿部委員 今の質問と少し重なるのですが、27ページの小4のマサコさんの例や、25ページの中1のアキコさんの例というのは、私の感覚として、実際にこういう例は余り聞かないのですけれども、これは現実的にある例ですか。

○村岡研修担当係長 私の経験上で申し訳ございませんが、保護者の方からこのような相談を受けたことはあります。

○阿部委員 保護者の方からですか。

○村岡研修担当係長 はい。小4のマサコさんですが、その子が胸の膨らみがすごく気になってとかですね。

○阿部委員 ということは、現実に近い例だということですか。

○村岡研修担当係長 はい。私はそう捉えております。

アキコさんの例の月経のことも、保健室に行く子がいるということは聞いています。

○池田（光）委員 最近問題になっている誘拐とか交通事故とか、その辺のところの充実性はどうかでしょうか。

○村岡研修担当係長 5年生のけがの防止に入ってます。

「東京書籍」ですと、20ページの犯罪被害の防止というところで、誘拐、暴力などを取り扱ったものが掲載されています。また、こういうときにどうするかということを考えることになります。

続いて、「学研教育みらい」ですが、5・6年生の22ページ、23ページになります。

犯罪から身を守るためにということで2ページ載せています。さまざまな場面や、地域で起こり得る状況を載せています。

○池田（光）委員 同じような感じですが、特色はそんなにないのですか。

○村岡研修担当係長 特にというところでは、「東京書籍」の27ページに、安全マップをみずから作成するような活動を取り入れています。自分からけがや犯罪の防止に役立てようということで載せられています。

また、「学研教育みらい」の23ページに、けが、犯罪、自然災害について、先ほどもありましたが、対処の例示が非常に数多く載せられています。実践的な対処につながるものと考えています。

○町田委員 23ページのインターネットを正しく使おうということで、「学研教育みらい」はある程度触れられているのですが、「東京書籍」は21ページに豆知識ということですね。

○村岡研修担当係長 インターネットの取り扱いについて、「学研教育みらい」については23ページの右下です。同じく5・6年生の教科書ですが、トラブルについて載っています。

○山中委員長 そちらのほう詳しいということですね。

○村岡研修担当係長 はい。「東京書籍」は、21ページのまめ知識のところにあります。

○山中委員長 ほかにありますか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長 特にご質問がないようですので、質問は以上として、これまでの審議、あるいは、教科書をご検討いただいた中で、皆さんが体育、保健の教科書として札幌市の子どもにとってどれがよいかということについてのご意見を伺いたいと思います。

これは、臼井委員から伺っていききたいと思います。

○臼井委員 まず初めに、両方の会社とも残念に思うのは、生活習慣病のことが載っているのです。これは、今、成人病と言わずに生活習慣病になったのですが、問題は、高血圧にしても、糖尿病にしても、むしろ小児になるということが問題になってきています。これを見ると、両方とも大人の病気として位置づけています。やはり、生活習慣ということ考えてみると、人ごとではないという視点で教科書はやるべきではないかと思うのです。

私は、どちらを選ぶかという、「学研教育みらい」を支持したいと思います。

その理由は2つあります。

一つは、教科書のスペースが大きいというところで、図にしても、説明しても、非常に直感的にわかりやすいということが第1の理由です。

第2の理由は、例えば、6年生のものを見ても、思春期は誰もが悩むものということです。先ほど、性的な成熟のところもありましたが、具体的な子どもの事例を挙げているということは、やはり、こういう問題は、何となく抽象的に書かれていてもわかりにくいのですが、等身大の自分たちと同じような年代の例が出てくるということは、親しみがあるし、指導上もやりやすいのではないかと思います。

この2点で、私は「学研教育みらい」を推したいと思います。

○池田（官）委員 私も、「学研教育みらい」を推したいと思います。

内容については、「東京書籍」と「学研教育みらい」の差はほとんどない、あるいは、どちらにもよいところがあると思います。そうなってくると、見やすさや写真の豊富さ、それに加えて、「学研教育みらい」のほう情報が若干豊富だと思います。

そういうところから、全体の見やすさ、写真を含めた情報の豊富さということで、学研みらいを選びたいと思います。

○阿部委員 私も、「学研教育みらい」のほうがよいと思っています。

理由としては、「学研教育みらい」のほう情報量が多いという点と、細かいところまで掲載されていて、なおかつ見やすさというのも「学研教育みらい」のほうがよいと思いました。

○池田（光）委員 私も、「学研教育みらい」を推したいと思います。

ただ、両方とも残念なのは、もっともいろいろな工夫ができるのではないかと思います。もしかしたら、競争原理が余り働いていない分野なのかなと気になっています。

例えば、写真を大きくしたり、小さくしたり、めりはりをつけたり、いろいろなことをもう少し入れて、子どもたちの興味を引く、どちらかというと羅列してあるような感じがするので、その辺ももう少し工夫していただければありがたいということですが、「学研教育みらい」を推したいと思います。

○町田委員 私も「学研教育みらい」の教科書を推したいと思います。

理由は各委員と同じで、まず、見やすいということであります。

それから、先ほどお話ししていたインターネットを正しく使おうということですが、インターネットの正しい利用法と言うのでしょうか、スマートフォンやLINEなど、そういったものを一つのコミュニケーションの手段として子どもたちがどう使っていくように指導していくのかということは、教育委員会としても大きな問題だと思うのですが、この教科書の中にもそういう指導していくきっかけのようなものがあるので、よいのではないかと思います。

○山中委員長 ありがとうございます。

これも全員一致と考えてよいと思いますが、基本的にわかりやすい事例、情報量が見やすいとか、そういうようなお話が共通かと思います。

ということで、体育、保健については、「学研教育みらい」を選定するということがよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 ただ、改善していただきたい点もいろいろあるようですから、その辺は、今後、この教科書を使っていく中でいろいろ研究していただいて、教科書会社に要望するということも札幌市教育委員会としては考えておくのがよろしいのではないかと思います。

以上で小学校は終了にいたします。

次に、高等学校並びに中等教育学校後期課程用の教科用図書について審議をしたいと思います。

高等学校並びに中等教育学校後期課程用の教科用図書については、審議会から、学校ごとにそれぞれの教育課程に応じた選定の候補が挙げられてきております。

前回の審議で、高等学校部会の部長からいろいろな説明がありました。その後、皆さんでも教科書を検討されたかと思いますが、それを踏まえ、この段階でご質問はありますでしょうか。

実質的な審議は本日が初めてとなりますので、ご質問などがありましたら、ぜひお願いいたします。

候補は既に選定されていますので、候補の審議はありませんが、この教科書でよろしいかどうかを決定するといえますか、教育委員会会議として選定するわけですので、その前提として質問があればお出しください。前回もそれなりに質問は出ていると思いますが、さらにありませんか。

○池田（官）委員 高等学校あるいは開成中等教育学校の後期についてですが、前回の会議では、特に英語について生徒の自主性、生徒の実際の状況に応じた教科書を、目的をかなり持って選んでいるのだというご説明をいただいて、よくわかったように思っていますが、ほかの科目についてはどうなのでしょう。

例えば、国語とか数学といった科目については、教科書の選定の仕方として、生徒の状況に合わせて選び方を具体的にどのようにしているかということについて、例を挙げて説明していただければと思います。

○幸丸高等学校担当係長 ある教科を取り上げてということであれば難しい部分もあるのですが、今ご質問がありました国語について、今回、開成高校と開成中等教育学校が開校するということが、例として若干挙げやすいので、そち

らでお話しします。

今年度に1年生で入学している開成高校の生徒は、国語は年間4単位ということで、週4時間の授業を行っています。

ただ、来年度に開校する開成中等教育学校では、国語の部分、コズモサイエンス科でも5単位と週5時間に時数を増やしています。そうしたときに、教科書の選び方がどう変わったかというところに注目すると、実は、今年度、1年生で開成高校が使っている教科書は、古典と現代文が1冊にまとめられた国語総合というものを使っているのですが、開成中等教育学校で1単位増加したことによって、今度は古典と現代文を別々に分離した内容の少し詳しい教科書ということで、時数が増えた分、細かく学習できるような選び方をしています。

このような中身で、各教科がそれぞれのレベルに合ったものを使っていますので、前回の教育委員会会議でも説明させていただきましたが、それぞれの学校が入学者選抜をしますので、各校で指導される教員の先生方がしっかりした進路のもとに選べるような中身になっているかと思います。

○山中委員長 今、開成のことが中心でしたが、ほかに気になることはありますか。

○池田（光）委員 細かいことでもよろしいですか。

旭丘高校の8分の8のところで、情報の科学の一番下に、モデル化とシミュレーションの例題があって、アプリケーションを用いるものと用いないものをバランスよく配置するとあります。これは、用いないものがあることによってバランスよく配置できるものなのですか。

○幸丸高等学校担当係長 情報の授業については、私も専門の教科の担当ではありませんので、ここについての詳細な説明はできないのですが、今、ネットワークの部分で問題になっているのは、この教科書で言うと、特定のアプリケーションを使う場合に問題視される部分の指導についてと、もう一つは、特定のアプリケーションを使用しない場合、全てのITとICT機器を使う場合の内容について、それぞれ区分けして掲載しているという中身だと思います。

例えば、今、画面に映っていますのが、モデル化とシミュレーションの例題の該当ページになります。こちらは、コンピューターを利用したシミュレーションということで、パソコンでシミュレーションしているものが掲載されています。ただ、前のページに戻ると、例えば、ケーキ詰めのシミュレーションを試みようというところでも、コンピューターを使ってシミュレーションしているのではなく、試行の段階でシミュレーションをしたものを、今度はそこか

ら次のページで、コンピューターの使用によってシミュレーションをするというふうにつなげているということがこの教科書から読み取れるところが特徴かと思います。

○池田（光）委員 教科書の例題がバランスよく配置されているという意味ですね。ですから、これによってシミュレーションが相乗的に効果を発揮するという意味ではないのですね。たまたまそれを使っていないときと使っているときで手作業とコンピューターでやっているのは、この事例がうまく記載されているということですね。勘違いしていました。申し訳ありません。

○池田（官）委員 各教科書選定、高等学校等についてです。

やはり、受験という問題があると思うのです。大学進学に当たって支障がないようにといいますか、カリキュラム編制のことがあるかもしれませんが、各学校での教科書の選択というのは、大学受験については、どの程度念頭に置かれて選択されているのでしょうか。

○幸丸高等学校担当係長 市立高等学校については、ご存じのとおり、普通科の高校については全てが進学を目指している学校でありまして、市立大通、啓北商業高校については、就職の希望者も多いのですが、その後に進学ということを見ると、ただ、入学者選抜の状況から考えも、入ってきている生徒の層は違いが若干ありますので、それなりに、大通、啓北商業については、基礎、基本をしっかり固めた上で、進学にも耐え得るもの、しかも、教育課程の設定についても、その部分をきちんと網羅できる形で教育課程を組んでいる状況です。

ただ、昨今、授業改善ということが言われていますので、教科書だけではなく、その授業のあり方に合わせて教科書を選んでいくということも考えられています。ですから、進学については、どの学校も、生徒の進路実現を果たしたい、夢を実現したいというところがありますので、それに合わせた形で、毎年入ってくる生徒の波もありますので、それをきちんと注視して、それに合わせて選んでいくという状況だと思います。

○山中委員長 昔、高等学校の教科書の選定理由に受験に最適であるということを書いていた時代があって、それはあからさま過ぎるのではないかという話になったことがあります。そういう意味では、受験ということは余り書いていないのですが、進路ということを考えて、適切な教科書を選択していますということではあるかと思います。

ほかにありますか。

○池田（光）委員 共通していることで、思考力とか創造性を伸ばしていくという工夫の中で、一つの事例みたいなものはありますか。これはよい参考事例だというものはありませんか。漠然としていて申し訳ないのですが、重点項目の中にほとんど入っていますね。生徒の意欲を高めて創造性を育み、発展させると。

○幸丸高等学校担当係長 具体的な教科書でということですか。

○池田（光）委員 そういったものはありますか。

高校のときは、そういう創造性を育むにはどんな工夫をしたらよいかということを知りたかったのです。例えば、英語で一つのセンテンスを書いたものを訳させるということでもいいです。

○幸丸高等学校担当係長 前回、画面で説明させていただいたところに出ていたかと思います。例えば、リスタートスピークという単元です。これは何を意味しているかと言うと、地図上にあるそれぞれのポイントですね。こういったものについてどのぐらい時間がかかりますかというような、英語だけではないものでいろいろな部分を考えるというか、例えば、いろいろなルートを通って行ったときに何分かかるかというようなことを、それぞれ下のところにバンクやハイスクールなどありますが、自分がいるところから銀行、高校、レストラン、図書館に行くということになるとどのぐらいの時間がかかるのかということ、英語という言語だけではなくて志向させるという工夫があらゆる科目の教科書に記載されていると思います。

○山中委員長 ほかに質問はありますか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 特に質問がなければ、具体的な選定についてご意見などはありませんか。

これについては、個別にお一人ずつ伺っていくということではなくて、ご意見があればお伺いするほうがよろしいかと思いますが、いかがでしょうか。

○阿部委員 大通高校の国語の科目が継続ではなくて全部が新となっております

す。そうなった場合に、現場の混乱などは心配しなくても大丈夫なものでしょうか。

たまたまそうなったのかもしれないですけども、全てが新となっております。

○幸丸高等学校担当係長 例えば、学年の継続性という部分で、同じ系統の教科書を使わなければその内容の学習ができないということではなく、高校の場合は毎年採択しているということは、それぞれ見直しをかけているということで、現在使用している教科書の教材研究のままということではなく、新しい題材を使うことによって、また新たに授業改善を図ろうとしているところだと思います。それぞれ専門性の高い先生方がいらっしゃいますので、現場での混乱ということは問題ないかと思います。

○山中委員長 具体的な選定についてご意見はありますか。

○池田（光）委員 初歩的な質問で意図と合わないかもしれませんが、成績差といえますか、どの辺を基準にした教科書なのかという議論をしたことがあるのでしょうか。

そういうランクがあるかどうかわかりません。これは難しいかなとか、易しいかなとか、そういうことはあくまでも教室の中での判断になってくるのですか。それとも、あるレベル差のようなものがあって、それで選定しているのでしょうか。

○山中委員長 同じ高校の中での学力差みたいなことを考えて、何段階かに分けた教科書を採用するということがあるのかという趣旨ですね。

○幸丸高等学校担当係長 1 学年のときには、それぞれ入学者選抜でほぼ同一の学力であると思われる集団として入ってきますが、学年進行でその差が徐々に開いていきます。そうすると、学校の中では、進学に合わせて文系、理系という分け方をしてくるので、文系、理系で使う教科書は変わってきますし、一つの教科書でも基礎、基本をちゃんと網羅した教科書であれば、その上に、例えば、数学の例題何かを上げさせていただくと、基礎の例題があって、応用の例題があると、レベルの習熟度別学習を行っている学校もあるのですが、そちらでは、習熟度の低い子たちには基礎の例題をしっかり学ばせて、習熟度の高い子たちには応用例題を学ばせるという形になっています。ですから、そこについては、その学校の平均とは言いませんが、平均的に全ての生徒たちが対応

し得るレベルということで、先日も幾つかのレベルがあると説明させていただいたのですが、その中から先生方が現状に合わせてこの教科書がよいのではないかという形で学校の教科書選定委員会の中で選ばれてきていると考えています。

○池田（光）委員 結局、新しい分類のものはこの中にはないということですね。

例えば、クラス別になって、それに使う教科書はまた別個に新しいものを使うと言ったのは、それはこの選定一覧の中にはないということですか。この中に既に入っているのですか。

○幸丸高等学校担当係長 例えば、平岸高校の8分の3のところを見ていただきたいのですが、ここの一番下に数学Ⅱの6単位選択者とあるのですが、これが、数学で言うと習熟度の高い子たち、理系選択の子たちが使っているものです。その裏の8分の4のところにある同じ数学Ⅱですが、こちらは、4単位選択者ということで週に4時間しか数学をやらない子たちが選んでいるものです。この教科書は、番号が違ってするように、同じ「数研」から出されていますが、グレードが違うというか、レベルの違う教科書となっていますので、このような形で選定しているとご理解いただきたいと思います。

○山中委員長 そのほかにいかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○山中委員長 そうすると、高等学校並びに中等教育学校後期課程の教科書の選定については、審議会から上がってきている内容のとおり選定するというところでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○山中委員長 では、そのように決定させていただきます。

では、最後になりますが、特別支援教育用の教科用図書について審議をさせていただきます。

特別支援教育用については、児童生徒の障がいの種類や程度に応じて、一人一人に適した教科用図書を提供できるようにという観点から、各種目とも幅広く選定の候補が挙げられています。

その説明を前回受けて、それなりの質問をされたと思いますが、本日、さらに質問したいということがありましたらお願いします。

○池田（官）委員 特別支援教育用の教科書は、教科書として作成されたというより、一般に販売されているものだと思います。

そこで、値段に注目して拝見しますと、全部大体そろっているところだと思いますし、そう高価なものは入っていないと思いますが、こういった金額の面で選択が逆に制約を受けたということはないでしょうか。

この本はとてもよい本だけれども、値段が高かったのここに入れるのはやめたというような例はないでしょうか。

○山田特別支援教育担当係長 これまでの選定の中では、北海道教育委員会から示されている採択参考資料の中にも価格が示されていて、価格も当然拝見しながら選定を進めてまいりましたが、まずは内容を重視する中で進めてまいりました。

明確にお示しはできないのですが、価格で言えば、600円台ぐらいのものから、高額のものでも2,000円とか3,000円程度にはおさまってしまっていて、これまで価格でこれはやめようという議論になったことはありません。

○池田（光）委員 実際に教科書を選定するに当たって、だんだん少なくなっているという現実をこの間見まして、それによって選択幅が狭まるという意味では、そういうものをもっとたくさんつくってもらいたいという要望を、これはどこにしたらいいのかわかりませんが、そういうことはしたほうがよいものですか。ここの議論ではないかと思いますが、一緒に考えなくてはいけない問題ではないかという気がしますし、ここでしかそういう議論はできないのではないかと思います。実際に使う人たちのところで初めてそういう要望が出てくるのではないかと思うのです。そういうところで、もし所感がありましたらお願いします。

○山田特別支援教育担当係長 先ほどもお話をいただいたように、一般図書については、本来的に教科書という趣旨のものではないものなのかと思うのです。そういう観点で、発行者も現実的には多くあるかと思うのですが、その中でまとめていくのはなかなか難しい面もあると思います。これは私の感想ですが、そのように思います。

○山中委員長 このような内容のものが欲しいという声が特別支援学校を担当

している方々から出ることはあるのでしょうか。

○山田特別支援教育担当係長 そうですね。ただ、現在、採択参考資料に入っていない一般図書を選定審議会の委員の方から推薦していただくような流れをとってから、それぞれの先生方のこういうものが欲しいという声に対しては反映できるようになってきていると思っています。

あとは、もし今後考えられることとすれば、文部科学省著作の星のマークがついた本があるのですが、国語と算数・数学と音楽の3教科しかないものだから、本来的に必要ということであれば、文部科学省から著作して出していただくということも考えられることの一つにはなるかと感じています。

○池田（光）委員 その星のマークはどうやっていただくものですか。誰が認定するものですか。

○山田特別支援教育担当係長 これは、文部科学省であらかじめ著作して、子どもの障がいの状態とか発達の状況によって選べるような形になっています。

○山中委員長 星のマークは文科省でつけているのでしょうか。三つ星や、五つ星などありますね。

○山田特別支援教育担当係長 星は難易度でして、星が四つになると中学部用とか、星が一つであれば小学校低学年用とか、そういう形になっています。

○山中委員長 文科省が認定というか、判断しているわけですね。
ほかにいかがでしょうか。

○池田（官）委員 文科省の著作教科書についてですが、今、改めて見ますと、発行者は、国語が「東京書籍」、算数・数学が「教育出版」ということで、出版社はもちろん一つだけではないと思うのですが、幾つかある中で文科省が選んだということになっているのでしょうか。それとも、文科省で幾つか候補を出して今回の部会で選んでくださったという形なののでしょうか。

○山田特別支援教育担当係長 文部科学省から示されているもので、知的障がい教育用については、例えば、国語であれば「東京書籍」とか1者しかないのです。

○池田（官）委員 文科省が1者にしか依頼をしていないということですか。

○山田特別支援教育担当係長 そうです。

○山中委員長 事実上、国定ですか。

○山田特別支援教育担当係長 数学であれば「教育出版」です。

○町田委員 著作権は国が持っているということですか。

○山田特別支援教育担当係長 そうですね。文部科学省著作の教科用ですので。

○町田委員 検定というのではなくて、著作なのですね。

○山田特別支援教育担当係長 そうです。

○臼井委員 この件で、前に私がこの選定審議会をやったときに、高校の水産とか、生徒数が少ないもので、商業ベースに乗らないものについては文科省でやっているものもあります。

○池田（光）委員 内容が1パターンですね。一般のものから見たら、図とか色合いとかも含めて。

○阿部委員 シンプルですね。

○臼井委員 ある面では競争があるのです。

○池田（光）委員 私が感じたのは、まさに実際に選定するところが声を上げるような仕組みをつくっていったらよいのではないかと思います。より充実させたほうがよいと思うのです。

○臼井委員 ただ、現実には、適用可能な子どもの障がいの程度があるわけで、3年生の子どもにこれというように通常学級のようにいかないわけですから、3年生といっても子どもの障がいの程度ということになるので、そのあたりは、そのまま使うというよりも、かなり個別的にアレンジして使っているのが実態でしょうね。

○山田特別支援教育担当係長 通常の学級で使う教科書を使うお子さんもいますし、一方で、こういった一般図書を教科書として使う例もあります。そこは、たとえ同じ学年であっても、障がいの程度によってかなり幅広くなっているのが現実です。

○山中委員長 ほかにありませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○山中委員長 なければ、特別支援教育用として候補に挙げられている教科用図書を選定するということによろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○山中委員長 それでは、そのように決定させていただきます。

本日は、大変長時間にわたり、予定時間も過ぎてしまいまして大変申しわけございませんでしたが、本日の審議において、小学校用教科書、高等学校並びに中等教育学校後期課程用教科書、そして、特別支援教育用教科書の選定が終了いたしました。

本当に長い間、ありがとうございました。

なお、特に小学校の関係が中心ですけれども、その選定理由については、これまでの審議を踏まえて、少し細かく事務局でまとめてもらって、それを次回の教育委員会会議で議案として提出していただいて決定するというようにさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○町田委員 それが採択理由になるのですね。

○教育次長 採択理由です。

○町田委員 採択理由を今度の8日(金)にかけるのですね。

○教育課程担当課長 あわせて議案として提出します。

○池田(光)委員 その中で、先ほどのもう一期継続しようというものがあり

ましたね。あれは、同じような内容だったので、現在のものを継承しようという形がよいのではないかと思います。その辺は明確にしたほうがいいかと思っています。

○山中委員長 条件のようにしてつけるのは少し難しいのではないのでしょうか。教科書そのものも4年後には変わりますし。

○池田（光）委員 継続ということで採択しなかったという位置づけが要るのではないかと思います。

○山中委員長 継続という形での採択ではないと。もちろんです。それは前提として、資料の上では継続と書いてありますけれども、あれはある意味で参考的なものです。同じ教科書を使っているわけではないので、そこはそういうご理解でいただいたほうがよいと思います。

よろしいでしょうか。

次回は、選定理由について皆さんに確認していただき、最終的に中学校用、高等学校用、中等教育学校後期課程用と特別支援教育用を含めて、平成27年度に使用する教科書を採択するという形をとります。選定の後に採択をするという少しわかりにくい仕組みになっているのですが、そういうことになりますので、よろしくお願いします。

皆さんから要望等がありますか。

○池田（光）委員 しつこいようではありますが、特別支援教育用のあり方については、教育委員会で一回話し合ってもよいと思っていますので、機会を見てお願いしたいと思います。

【閉 会】

○山中委員長 それでは、以上で、平成26年度第18回教育委員会会議を終了いたします。

本当に長い間、ありがとうございました。お疲れさまでした。

以 上